

静岡英和学院大学

# キリスト教研究年報

第三号

キリスト教研究年報  
二〇一五年三月

2015年3月

静岡英和学院大学 キリスト教研究会

静岡英和学院大学  
キリスト教研究会

# キリスト教研究年報 第三号

## 特集：キリスト教と出会い

### 目次

---

第三号発行によせて……………	静岡英和学院大学学長 武藤 元昭	
大学生によるキリスト教受容過程……………	人間社会学科 谷口ジョイ	1
長崎の教会群とキリスト教関連遺産の世界遺産登録と観光……………	人間社会学科 崔 瑛	7
民衆本『ティル・オイレンシュピーゲル』と宗教改革運動の接点についての一考察 ……………	人間社会学科 伊勢田奈緒	13
キリスト教主義園における保育方針の具現化……………	前コミュニティ福祉学科 鈴木 幸子	25
キリスト教における「食」教育の実践例とその意義についての検討 ……………	桜の聖母短期大学 木下 ゆり	35
2014年度のチャペルとキリスト教行事の報告……………		43
2013年度職員研修会におけるレジュメ……………	前青山学院院長 山北 宣久	45
執筆要綱……………		46
編集後記……………		47



## 第3号発行によせて

学長 武藤元昭

『キリスト教研究年報』の第3号が発行されることになった。伊勢田宗教主任を初め、本学のキリスト者教員の皆さんの熱意によってこのような運びに至ったことは、洵に喜ばしいことである。キリスト教信仰を建学の土台としている大学は、全国に数多くあるが、殆ど例外なくどの大学もキリスト者教員が減少している。本学も同様である。そうした状況の中での第3号であるから、本学にとっても価値のあるものだと言えよう。

執筆者は、宗教主任を初め、現教員、前教員とさまざまであるが、前教員の執筆参加は本学への思いを感じさせてくれる。

論文は、各執筆者の専門性を大いに生かしたものとなっている。各々の研究分野がキリスト教と密接な関係を持っていることが窺えて、心強いことである。

キリスト教大学にとって、建学の精神を堅持して行くというのは、現在の趨勢ではなかなか厳しいことである。学内の関心を惹くのも容易なことではない。しかし、そうした現状にただ手を拱いているだけでは何も始まらない。やはり神の意思を体して祈りをもって地道に活動して行くしかない。その意味で、宗教センターの働きは大きい。現に、学内のキリスト教活動は、宗教センターが牽引している。学長にとっても、宗教センターへの期待は大きいものがある。

その宗教センターが、苦しい状況の中でこの『キリスト教研究年報』を出し続けることは、大学にとっても感謝すべきことである。希わくは、多数の方々が本年報を読んで下さらんことを。それによって、静岡英和学院大学が真にキリスト教大学の名に相応しい大学であることが認知されれば、甚だ幸せである。

今後も本誌が続刊されるよう大いに期待したい。



## 【研究ノート】大学生によるキリスト教の受容過程

谷 口 ジョイ

### 1. はじめに

あなたの若い日に あなたの造り主を覚えよ  
コヘレトの言葉 12章1節

キャンパス・ミニストリー (Campus Ministry) という名称が聞かれるようになって久しい。キャンパス・ミニストリーとは、米国に端を発した活動であり、大学、殊にキリスト教精神に基づいた大学における宗教活動の総称である。キリスト教の信徒が半数以上を占める欧米諸国の大学においては、礼拝をはじめ、少人数での聖書研究や信仰の共有、パーティやキャンプなど、幅広い活動が行われている。一方、非キリスト教国である日本においては、キャンパス・ミニストリーの活動内容や意義は、欧米のそれと異なる。

本学は、キリスト教主義教育の理念が建学の精神として明確にうたわれているが、入学する学生のほとんどがキリスト教に接点をもたない。これは、キリスト教信徒が人口の1%にも満たないという日本の現状を顧みれば、驚くに値しないが、このような学生に対するキリスト教理解の促進は、キリスト教信仰を基盤とする本学において、重要な教育的意義をもつ。本学においても、建学の精神に深く関わる活動として、ミニストリーの役割が重視されており、その主なものとしては、「リトリート」と呼ばれる全新入生を対象とした静養会、キリスト教に関する必修学科目の開設や礼拝等があげられる。その他にも、宗教主任が中心となり、クリスマスイベントの企画などキリスト教に関連したさまざまな活動の運営がなされている。

本稿は、キリスト教信仰に基づく高等教育機関で学ぶ学生たちが、上述のようにキャン

パス・ミニストリーを通し、どのようにキリスト教を理解し、受容していくのかを考察する目的で執筆された。主な研究課題は以下二点とし、本学で学ぶ学生がキリスト教をどのように理解し、受容するかについて、質的に調査する。

- (1) キリスト教を基盤とする大学に入学した学生の多くは、これまでとは異なる新しい体験をする。このような学生は、礼拝をはじめとする様々な事象を、どのように知識として取り入れ、内在化、構造化するのであろうか。
- (2) 本学の学生は、キャンパス・ミニストリーを通してキリスト教に対する意識や認識を新たにするのであろうか。また、彼らのキリスト教受容に影響を与えるのは、どのような宗教活動であらうか。

### 2. なぜ質的研究か

LeCompte & Preissle (1993) によれば、研究を行う際には3つのメタ的な方法論が存在するという。これらは「論理実証アプローチ」「解釈的アプローチ」「批判的アプローチ」と呼ばれるが、本研究では「解釈的アプローチ」を採用している。なぜなら、キリスト教主義の大学に通う学生のキリスト教受容について研究するにあたり、彼らの宗教活動との接触体験は多様であり、その多くは大学における礼拝やキリスト教に関連した授業ではあるものの、こうした活動を個々人がどう捉えるかは一様に語れない。個々人がどのような背景にあり、また「キリスト教」という異文化をどのように認識し、自らのアイデンティティと融合させていくのかを知るためには、

個別の語りからその意味を分析し、理解する必要がある。また、調査協力者の家庭環境、生活環境は複雑であることから、条件を統制し、ノイズを除去した上で調査にあたるのは不可能であった。よって、たとえ調査者数は限られたものであったとしても、キリスト教との接触による新たな認識形成の実態を捉える上では、質的研究手法が有効であると考えた。

### 3. 研究方法

本学に在籍する10名（4年生1名、3年生5名、2年生4名）に対し、20分から40分の半構造化インタビューを行った。調査協力者のうち1名はキリスト教信徒であり、他の9名は、大学に入学するまでキリスト教と接点を持っていない。調査協力者へのインタビューで得られた音声資料はすべて文字化された。

#### 例1

発話者	発話内容	第1次	第2次
調査者： (以下 E)	で、えっと、教会にも通っていて、その、いくつかの場所でキリスト教に触れていたと思いますが、どこが一番、やっぱりあの、影響を与えていますか？ S1さんに。		
S1:	私は多分、 <u>幼稚園が一番かな</u> と思うんですけど。	キリスト教系の幼稚園のインパクト	キリスト教受容の原体験
E::	あ、そうですか。		
S1:	んっと、そのキリスト教の幼稚園だったもので、歌とか歌ったり、なんか先生たちも、こうキリスト教に基づいて、いろいろ。はい、んと、礼拝みたいなもの…も、あったし、なんか多分、 <u>そこが私の中には多分一番印象が強いかな</u> って思ったんです。	幼稚園における宗教活動	

以下は、大学に入るまでキリスト教との接触がなかった S3、及び S4 の発話である。

れ、木下（1999）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach, 以下 M-GTA）に基づき、分析がなされた。木下は、Glaser & Strauss（1967）のコーディングにおける文脈との切り離しを疑問視し、より包括的にデータを捉える M-GTA を提唱した。本研究においても、発話全体の流れを注視し、調査協力者の発話を意味のまとまりごとに単一のカテゴリーとし、その内容を概念化した。次に、これらの第1次概念の中から類似したものをまとめ、第2次概念、第3次概念と、より抽象度の高い概念名を設定し、「カテゴリー」としてまとめ、さらにカテゴリー同士の関係性について考察している。以下の例1は、調査協力者の中で唯一のキリスト教信徒である S1 の発話データの一部であり、次のように概念化された。



大学生のキリスト教受容に関わるものとして、以上の4要因について検討を加える。10名の調査協力者のうち1名は、以下の発話例のようにキリスト教にまったく関心がないことを強調していた。

例3

E: チャペルの中で有益だったこと、好きだったことは、何かある？

S5: なんも覚えてないです。あの一、「隣人を愛せ」ぐらいかな。それしか覚えてないです。

一方、他の調査協力者のキリスト教受容に関する語りを詳細に見ていくと、何らかの形でキリスト教への認識を新たにしていることが見て取れる。

例4:

E: この大学に入学して、キリスト教に対する理解は深まりましたか。

S3: 大学入る前は、自分は無宗教、というか、特にどこかの宗教、という感覚はなかったんですけど、ちょっとキリスト教寄りになった気はします。

また、大学入学前にキリスト教に触れていたS1においては、キャンパス・ミニストリーへの否定的感情が見られるが、これは大学教育制度とも関連している。キリスト教主義の幼稚園で学んだS1は、自らプロテスタントの中高一貫校に進学することを希望した。在籍していた中高一貫校では、毎週教会に行くことが義務づけられており、日曜日は母親と礼拝に出席することが習慣化し、家族でただ一人、洗礼を受けて、キリスト教信徒になっている。S1の発話から、これらの要因について考えていきたい。

例5:

E: ジャ、あの一年生の時に礼拝に出ていたと思いますが、いかがでしたか。

S1: そうですね。やっぱり、ずっと中高と朝は礼拝があったので、それと比べると、何か…こんなものなのかみたいな感じがあったんですけど。

例6:

E: キリスト教信仰に基づいた大学に入学してよかったなと思う点がありますか。

S1: ん、そうですね。いや一、特になかったかもしれないです。元々、やっぱり中高で学んだんで、そのままという意識があるので、特に… いや、でも、一年生以外、結局キリスト教も、礼拝もないもんで、もう一年で終わり…という感じですよ？

E: もうちょっと二年生、三年生、四年生くらいまで、いろいろ、こう…礼拝があったほうがよかったと思いますか。

S1: 私自身、こう授業も詰まってるもんで、いや、これ以上増えたらまずいという。

E: あ、余裕がないということですね。じゃ、もうあの、クリスチャンとしての生活は、こう教会で、っていうほうが…

S1: そうですね。でも、学校に、クリスチャンの子がいるなら、なんか、どの子がちょっと知りたかったなと思います。

E: あ、そうですか。なんかそういう、ちょっとした集まりというか、コミュニティがあったら…

S1: 先生も誰がクリスチャンなのかまったくくわかんないので。

上記の発話内容からS1が、キャンパス・ミニストリーが主に一年生を対象としており、キリスト教信徒である自身に有益でないと感じていることが分かる。また、クリスチャンの学内コミュニティがあればいい、といった趣旨の発言もあった。また以下、S7の発話からも、本学の教育制度上、キャンパス・ミニストリーの対象が一年生に制限されることを「仕方ない」と受け止める様子が見られる。

例 7

E: 二年度以降キリスト教を学ぶ機会がなくなっていて残念でしたか。  
S7: んー、でも、大学は、しょうがないかなというのはやっぱりありますね。こう、授業が、こう形違うし、先生っち（注：方言／「先生たち」の意）も、クリスチャンじゃない先生がほとんどだし、しょうがない…しょうがないですね。

5. まとめ

以上、キリスト教主義の大学である本学で学ぶ学生のキリスト教受容に影響を与える要因を「個人要因」「キャンパス・ミニストリーの要因」「大学教育制度の要因」「文化的要因」に設定した。そして、それらの要因がこれまでとは異なる新しい宗教体験に対する認識にどう作用するのかを考察した。また、各要因と本学学生の、キャンパス・ミニストリーを通したキリスト受容との関連をインタビューでの発言をもとに記述した。その結果、本学に入学し、はじめてキリスト教に接触する学生のほとんどが、キャンパス・ミニストリーを肯定的に捉え、キリスト教に対する認識を新たにしていた。

インタビューデータから得られた現象を表す用語を抽出するためには、先行研究とどのようなつながりがあり、どう異なるのかを考える必要がある。キリスト教主義の大学に学ぶ学生によるキリスト教受容に関する先行研究は筆者の知る限りなく、時間的制限を考慮すれば、さらに研究テーマの幅を広げて過去の研究を参照しつつ、新たな知見を創造していかなければならない。また本調査の対象は、10名という限られた調査協力者であったため、概念やカテゴリーの質を高めるためには、対象者を増やし、継続的に調査を行う必要がある。これらを今後の大きな課題とし、本研究ノートを一旦閉じたい。

【参考文献】

Glaser, B.G. & Strauss, A.L. (1967). *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for*

*Qualitative Research*. Chicago: Aldine Pub. Co.

LeCompte, M. D., & Preissle, J. (1993). *Ethnography and qualitative design in educational research* (2nd ed.). New York: Academic Press.

木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』 弘文堂



# 長崎の教会群とキリスト教関連遺産の世界遺産登録と観光

崔 瑛

## 1. はじめに

平成 26 年 9 月 17 日、日本政府による「長崎の教会群とキリスト教関連遺産（以下、長崎教会群遺産）」の世界文化遺産登録推薦が正式に決まり、平成 28 年には世界遺産委員会で登録可否が決定される。

元亀 2 年（1571 年）、ポルトガルの貿易港として開港された長崎は、西洋文明との交流の拠点として特有の文化を有する魅力的な地域であり、日本キリスト教の歴史を象徴する意味合いがある。長崎教会群遺産は、16 世紀におけるキリスト教の伝播と普及、禁教令以降のキリスト教徒に対する迫害と長期の潜伏からの復活という日本キリスト教の歴史を表す資産で構成される。長崎には、世界文化遺産の構成資産以外にも 130 以上の歴史ある教会の存在があり、現在も人口当キリスト教信者数の多い地域である。長崎の教会は地域住民にとって礼拝（ミサ）を捧げる神聖な場所であるとともに、信者同士が集まるコミュニティとしての役割も担っている。また、韓国やフィリピン等の諸外国から訪れるキリスト教徒に宗教的意味の巡礼地として人気のある場所である。

ユネスコによる世界文化遺産登録は、長崎教会群遺産がもつ固有の歴史と現存する有無形の価値を、正式に認めてもらう契機となり、今以上に国内外から大きく注目を集めることが予想される。現時点において、世界文化遺産登録以降の観光客の増加を見据えた受入体制を整えることが必要である。観光客誘致と教会群遺産の保存が相互に調和し、観光による地域振興を図りつつ、宗教的場所である教会が持つ特殊な意味や長崎教会群遺産の世界遺産に相応しい顕著な普遍的価値について、

観光客の理解を高める工夫が求められる。

以上の背景を受け、本稿は長崎教会群遺産の世界文化遺産構成資産の状況を概観した上で、現地関係者に対するインタビュー調査を通して、①長崎教会群遺産を訪れる観光客受け入れの準備状況、②世界文化遺産構成資産の管理体制を把握する。NPO 法人世界遺産長崎チャーチトラスト（長崎の教会群インフォメーションセンター）、NPO 法人長崎巡礼センター及び長崎県世界遺産登録推進課の関係者を調査対象とした。

## 2. 世界遺産「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の概要

### (1) 長崎におけるキリスト教の布教・弾圧・潜伏・復帰の歴史<sup>注1)</sup>

天文 18 年（1549 年）にフランシスコ・ザビエルが日本に上陸し、翌年日本での布教活動を開始した。永禄 6 年（1563 年）には、初のキリシタン大名（大村純忠）が登場する等、長崎地域の信徒数は増加し、キリスト教の文化は当該地域の生活に根付くようになった。天正 15 年（1587 年）に豊臣秀吉によるキリスト教への牽制と禁教の動き（宣教師の追放や教会堂の破壊等）が始まり、慶長元年（1596 年）発生したサン・フェリペ号の事件以降、禁教はさらに強化された。江戸幕府による禁教令は、多くの教会堂の破壊とキリシタンへの弾圧・迫害を本格化させ、信仰を放棄しない教徒の殉教という結果を招いた。正保元年（1644 年）に、最後の神父となる小西マンショが殉教した後、何万人に至るキリシタンは、宣教師や神父等の指導者のいない中、長崎・外海、生月・平戸、五島列島地域で潜伏し、自らの信仰を隠すことで、信仰を

守り続ける生活を代々続けた。潜伏組織による洗礼の秘跡、教理、祈り、伝統の伝授が行われ<sup>1)</sup>、時間の経過とともに仏教的要素が取り入れられ、地域によって異なる形に変容した。このような潜伏時代は、明治6年(1873年)に禁教令が撤廃されるまでの250年間続いた。禁教令撤廃により信仰の自由を得た後も、カトリックに復帰せず、独自の信仰を守る選択をした人々は「かくれキリシタン」と呼ばれ、正式にカトリックに復帰した「潜伏キリシタン」と区別される。現在も長崎市の外海地域等の一部には、かくれキリシタンとしての生活を続けている人も残っている。

## (2) 世界遺産構成資産

上述のような長崎におけるキリスト教の受容過程(布教・弾圧・潜伏・復帰の歴史)を象徴するものが表1に示す遺産である。⑤の天草の崎津集落以外は、長崎県に位置する。⑧～⑭に示す教会堂は、信仰の自由が齎された喜びを表すために建設された長崎県各地の教会堂を代表する遺産といえる。

国宝の⑦大浦天主堂と関連施設は、既に団体観光客が多数訪問する観光スポットとなっており、巡礼の場所であるとともに、一般観光客のキリスト教への理解を深める場所としての機能も果たしている。一方、その他の教会堂(⑥、⑧～⑭)は、現在の信仰の場としての機能を、世界遺産登録後も維持できる仕組みづくりが必要である。

また③、⑥、⑧、⑪、⑬、⑭の構成資産は離島に立地するため、船による移動が必要であり、天候等の影響や移動時間の制限等の面に課題がある。また、公共交通手段等での移動が不便な場所もあるため、巡礼者や観光客の効果的スポット間移動に対する提案も必要である。

平成19年時点では、全35の構成資産候補が長崎県世界遺産学術会議により検討され、一時期は43の遺産に拡大検討が行われたが、世界遺産登録に向けた構成資産全体のコンセプトとストーリー、登録基準等の明確化、保存管理計画策定の作業が進むとともに、構成資産の絞込みが行われた<sup>2)</sup>。平成26年9月

<表1> 構成資産の一覧

文化財指定	構成資産の名称及び所在地 / 建設時期		構成資産の意義
国史跡	①日野江城跡(南島原市)		布教の拠点
国史跡	②原城跡(南島原市)		弾圧
国重要文化的景観	平戸の聖地と集落	③中江ノ島(平戸市)	殉教の地
		④安満岳と春日集落(平戸市)	山岳寺院の拠点 潜伏集落
	⑤天草の崎津集落(熊本県天草市)		潜伏集落
国重要文化的景観(県有形文化財)	⑥野崎島の野首・舟森集落跡(北松浦郡小値賀町)		潜伏集落
国宝、国史跡	⑦大浦天主堂と関連施設(長崎市) / 1864年		信徒発見の場所
国重要文化財	⑧旧五輪教会堂(五島市) / 1881年		カトリックへの復帰(信仰の復活)を象徴する教会堂
	⑨出津教会堂と関連施設(長崎市) / 1882年		
	⑩小野天主堂(長崎市) / 1893年		
	⑪黒島天主堂(佐世保市) / 1902年		
	⑫田平天主堂(平戸市) / 1917年		
	⑬江上天主堂(五島市) / 1918年		
⑭頭ヶ島天主堂(新上五島町) / 1919年			

(2014年12月15日の長崎県世界遺産登録推進課へのインタビュー結果をもとに作成)

の時点では、構成資産の数は13だったが、その後「平戸の聖地と集落」に対する再検討が行われ、同一遺産群間の距離等を考慮し、③「中江ノ島」と④「安満岳と春日集落」を分離し、最終的には全構成資産の数が14になる予定である<sup>注2)</sup>。

### 3. 巡礼者及び観光客受け入れ体制の現状

#### (1) NPO 団体による取り組み体制

(世界遺産長崎チャーチトラストと長崎巡礼センター)

平成26年4月に開所した長崎の教会群インフォメーションセンター（以下、インフォメーションセンター）は、長崎の教会群と関連遺産に対する質問への対応等の窓口である。既存の民間組織である認定NPO法人世界遺産長崎チャーチトラストのインフォメーションセンターとNPO法人長崎巡礼センターの長崎ステーションが業務スペースとして、長崎市の出島ワーフ2階にインフォメーションセンターの事務空間を共有している。



<写真1>長崎の教会群インフォメーションセンターの内部（筆者撮影）

NPO法人世界遺産長崎チャーチトラストは、「世界遺産登録」の支援に関わる活動に焦点を当てた組織であり、行政（県・市）と民間団体が主体で、カトリック長崎大司教区との共同設立に至った経緯がある。NPO法人世界遺産長崎チャーチトラストは、インフォメーションセンターを設置し、世界遺産関連の情報発信や来訪者への総合窓口業務を分離している。一方で、NPO法人長崎巡礼センターは、平成19年、カトリック長崎大司教区によりカトリックセンター内に事務所を構えたのがその前身であり、現在は出島ワーフ2階の長崎ステーションの他に、外海・五島市・上五島町にも地域ステーションをおく、巡礼体験を支援する団体である。NPO法人長崎巡礼センターの場合は、世界文化遺

産構成資産に限らず、長崎に存在する多くの巡礼地を体験する巡礼促進を目的とする性格が強い。事務空間を共有する両組織の性格が異なるため、固有の業務においても違いが存在する。国内外訪問者や観光客への対応は共通して行っているが、長崎巡礼センターは主に信者への情報発信や巡礼手帳等の巡礼を促す動機付けのシステム構築、キリスト教関連専門知識を持つガイド育成等を行っている。また、教会でのミサの予約と手配に関わっている。一方で、NPO法人世界遺産長崎チャーチトラストを母体とするインフォメーションセンターは、世界遺産に関する情報発信（ガイドブック、冊子紹介ビデオの制作）、世界遺産の構成資産である教会へ訪問する際の予約の管理とシステム構築、教会守の配置・管理に関する業務を担当している。また、世界遺産登録後の受け入れ体制構築やイベント企画にも力を入れている。

#### (2) 教会見学者の総合窓口「長崎の教会群インフォメーションセンター」の取り組み～インタビュー結果のまとめ～<sup>注3)</sup>

インフォメーションセンターの取り組みを世界遺産の保存・管理と教会守配置の2点から整理した。

##### 1) 世界遺産の保存・管理

世界遺産の保存・修復に対する意識の喚起や、世界遺産登録以降の入場者の制限について検討しており、特に、教会堂内でのマナーの周知に力を入れている。キリスト教徒ではない国内外の一般観光客は、教会堂内のマナーを理解していない人が多い。例えば、堂内で帽子を脱ぐことや物に触れないこと、写真撮影・飲食・喫煙等の行為を遠慮するように促すことが必要である。そのために、構成資産の歴史や情報を紹介する冊子やインターネットのホームページに、見学時のマナーを案内している。今までのマナー周知の効果もあり、以前に比べると教会堂内で大きい声で会話をする人やトイレのみを利用する訪問者は減少した。また、宗教的場所である教会の雰囲気を維持するためのシステムとして、事

前予約制を取り入れている。現在、田平教会と出津教会の団体訪問者を対象に実施している事前予約制を、世界遺産登録以降は、全構成資産の教会に拡大する方針であり、現在、旅行会社への協力要請や情報発信を行っている。また、世界遺産構成資産の管理のために、構成資産の関連情報を載せた資料等を作成・販売することを通して、構成資産の修復に要する資金を調達する基金（仮称：長崎教会群を守る基金）の設立を目指している。世界遺産構成資産のコアゾーンが県内の広い範囲に点在しており、バッファゾーンの景観と遺産の保存管理も合わせて推進する必要があるため、登録以降を見据えた取り組みを急いでいる様子である。複数の関係者で他事例（富岡製糸場）の視察・調査を行い、その情報を住民に公開するなどの活動を行っている。

インフォメーションセンターは、事務所の運営やスタッフの給与の面で長崎県の支援を受けているが、各種活動を推進するために、文化庁の助成金を獲得する等で、活動領域を拡大し、独自の地域貢献と遺産のマネジメントに関わる活動を進めている。

## 2) 教会守<sup>注4)</sup>

教会守とは、地域の信者等が担い手となり、教会付近に常駐し、訪問者の把握や質問への対応を担当する人のことをいう。インフォメーションセンターでは、現在2箇所（田平教会・出津教会）に教会守を配置し、管理業務を行っている。両教会とも、長い間ボランティアとして教会の管理を行ってきた信者の方が教会守を担っている。毎日の訪問人数を把握し集計する業務と教会関連管理業務（案内資料作成への協力、ミサ等の予約と準備）、訪問客への対応業務を担当している。教会守によると、世界文化遺産登録推薦が決まってから一般観光客が増加する傾向であり、多い時は1日100名～150名以上の団体観光客が訪れる時もある（田平教会）。教会守は、長い間教会に関わってきた地域住民で、地元のキリスト教関連歴史の知識と教会への愛着を持つ人が適任であると考えられ、現在、その条件に該当する人に業務が任されているとい

える。

教会守は、「世界遺産登録以降、巡礼者と一般観光客がともに増加することが予想されるため、その受け入れ体制を確立していく必要があり、それに関するアイデアを出すことに力を入れている」と述べている。また、「巡礼者には、長崎のキリスト教関連遺産の歴史を理解し、価値のある巡礼体験をしていただきたい」との見解を示していた。また、出津教会周辺の子クリスト教関連遺産群の管理は、今まで信者同士の自発的活動によって行われてきた側面もあり、今後の世界遺産登録とその後の管理に向けて、長期的管理計画の具体化が求められる。

今後は、教会守の配置にともない、訪問者への調査や訪問者の観光行動把握を行うことを進め、世界遺産登録以降の受け入れシステムの構築や体験・周遊プログラムの作成、情報発信に活用することを積極的に取り入れる必要がある。今後の工夫に期待したい。

## (3) 長崎巡礼センターの取り組み

### ～インタビュー結果のまとめ～<sup>注5)</sup>

長崎巡礼センターの関係者は、「長崎県内の教会群とキリスト教関連遺産は、世界文化遺産の構成資産だけではない」ことを強調しており、構成資産と長崎県内に点在する多くの遺産の歴史的関係やそれぞれの特徴（共通点と相違点）を説明できるように、知識体系を確立する必要があるとの見解を示している。

教会群の巡礼や情報発信において、テーマ性を強調することで、長崎での旅の意味と価値を付与することができる。日本のカトリックの生き様を理解してもらえるような仕組みをつくるためには、単純な情報伝達の資料作成にとどまらず、効果的に理解できる体験（ハンズオン型）の仕組み、コンテンツの開発が必要である。

長崎巡礼センターは、世界・日本・九州・長崎の歴史を照らし合わせ、長崎のキリスト教の歴史を説明できる専門知識や用語に精通したガイドを育成することが必要と述べており、そのための講座の実施に関わっている。

また、五島列島の49の教会堂と4の関連地を含む53箇所の巡礼を終えた人に巡礼証明書を発行する等の取り組みにより、巡礼へのモチベーションをあげる仕組みを提案している。現在、100名以上に、巡礼証明書が発行された。これは、世界遺産サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路においても活用されている仕組みであり、巡礼手帳と証明書の発行は、巡礼日数や巡礼スポットの増加につながる動機付けとなる可能性がある。また、証明書発行スポットは、巡礼コース計画の基準にもなりうるため、このような仕組みの活用度や魅力度を高めるよう、観光客の声を把握する必要がある。

#### 4. おわりに

長崎教会群遺産の世界文化遺産登録は、長崎県の交流人口拡大や地域文化の発信、経済活性化において地域内外から期待されている。

本稿では、長崎におけるNPOの活動を中心に、観光客の意識喚起や宗教的場所を守るためのシステム（予約、教会守）構築の現状を把握した。世界遺産の構成資産の保存・管理を進めるとともに、世界遺産に登録されない長崎県内に点在するキリスト教関連遺産の保存・管理や巡礼を促す仕組みを、広い視野で計画することが必要である。また、巡礼者の理解を促すコンテンツ開発が求められている現状を確認した。

宗教的目的で訪れるキリスト教信者と一般観光客（世界遺産目的、一般の長崎観光客）のニーズがそれぞれ異なるため、対象に合わせた計画づくりが必要といえる。

長崎教会群遺産の世界遺産登録と多様な訪問者向けの受け入れ体制づくりには、行政、NPO、カトリック長崎大司教区及び各教会関係者、住民間の相互理解と役割分担、協力関係の強化が必要であり、これからの課題といえる。

#### <注>

- 注1) 長崎県世界遺産登録推進課が制作した『世界遺産候補長崎の教会群とキリスト教関連遺産パンフレット』および『旅する長崎学6キリシタン文化』を参考に、2.(1)長崎におけるキリスト教の布教・弾圧・潜伏・復帰の歴史の内容を構成しまとめた。
- 注2) 長崎県文化観光物産局世界遺産登録推進課へのインタビュー(2014年12月15日)をもとに作成した。
- 注3) NPO法人世界遺産長崎チャートラストの長崎の教会群インフィメーションセンター企画部長榮信歳氏へのインタビュー(2014年12月13日)内容をもとに作成した。
- 注4) 教会守に関する記述は、長崎市出津教会(2014年12月16日)、平戸市田平教会(2014年12月17日)を訪問した際に、教会守と交わした会話内容をもとに作成した。
- 注5) NPO法人長崎巡礼センター事務局長入口仁志氏へのインタビュー(2014年12月15日)をもとに作成した。

#### <参考文献>

- 1) 片岡弥吉(2012)『長崎のキリシタン』聖母文庫
- 2) 文化庁(2008)『世界遺産暫定一覧表記載資産準備状況報告書』(www.bunka.go.jp/2014/12/10 閲覧)
- 3) 長崎県世界遺産登録推進課制作『世界遺産候補長崎の教会群とキリスト教関連遺産パンフレット』
- 4) 山中弘(2012)『宗教とツーリズム』世界思想社
- 5) 長崎県(2012)『長崎の教会群とキリスト教関連遺産-長崎県世界遺産アクションプラン-』
- 6) 長崎文献社(2007)『旅する長崎学6キリシタン文化』
- 7) 松井圭介(2013)『観光戦略としての宗教』筑波大学出版会



## 民衆本『ティル・オイレンシュピーゲル』と 宗教改革運動の接点について一考察

伊勢田 奈 緒

### 1. はじめに

『ティル・オイレンシュピーゲル』は、15、16世紀ドイツ文学史上の一ジャンルで内外の古い伝説や物語を民衆向きに改訂したり、新たに書き下ろされた、散文の娯楽小説である民衆本の中でも、特にもてはやされたものとされている。この本の主人公は、中世ドイツの伝説的ないたずら者ティル・オイレンシュピーゲルで、歴史上に実在した人物としては、1300年にクナイトリンゲン村で生まれ、1350年にメルンで病死したとされるが、この民衆本は1510年乃至、1511年頃出版されたと考えられている。これまで、民衆本については文学史または中世社会史の観点から論じられてきたが、宗教改革史との関連で論じられてきてはいない。本稿ではこの民衆本と宗教改革運動の接点を見いだすことを目標とした。特に、なぜ、オイレンシュピーゲルとされる人物の没後、160年も経て、著者とされるヘルマン・ボータ (Hermann Bote: 1463 - 1520) が『ティル・オイレンシュピーゲル』(以下、オイレンシュピーゲルと略す。)を執筆したのか、またこの本を通して、ルターによる宗教改革運動勃発当時の庶民はといった、教会を含む社会についてどのようなことを考えていたのかを推察しながら、宗教改革との関係を一考察したい。

### 2. 『オイレンシュピーゲル』とヘルマン・ボータ

『ティル・オイレンシュピーゲル』は、1510年乃至、1511年頃にシュトラスブルクにおいて『ティル・ウーレンシュバイゲル』

退屈しのぎの話』として成立し、その後、版を重ねていった滑稽話95話を指す。オイレンシュピーゲルの民衆本は、ゲレス (Gorres, J.)、ナウマン (Naumann, H.)、カドレック (Kadlec, E.)、マッケンゼン (Mackensen, L.) 等の研究者によって文体と内容、低地ドイツ語の用法などについて研究がなされてきたが、長い間、著者は不明であった。しかし、1973年に、ホネガー (Honeggert, P.)<sup>1)</sup> がチューリヒ・フラグメントと称する断片を発見し、それが1510年から1511年に、1515年版と同じグリーニガー書店から刊行されたものであることを明らかにし、1975年にはフッカー (B. U. Hucker) が、ほぼ完全な形の『ティル・オイレンシュピーゲル』を発見した。さらに、原本の90話以後のそれぞれの話のはじめの文字がERMENBとなっているのを発見し、これは明らかに署名であり、またその他の要素を併せて、ヘルマン・ボータが著者であることが確定された。すでに、1411年にオイレンシュピーゲルについて語る者がいることから、1510、11年版以前にオイレンシュピーゲルが主人公になっている何らかの書物があったことは明らかであり、また、『オイレンシュピーゲル』の冒頭で、「キリスト生誕から1500年の後、私N……はその昔ブラウンシュヴァイク公国に農民の子として生まれ、ティル・オイレンシュピーゲルと呼ばれていた活発で機知に富み、抜け目のない若者がドイツやその他南の国々で、しでかしたことを集めて書き下すように二、三人の人に依頼されました……。」とあること

<sup>1)</sup> Hermann, Bote, Till Eulenspiegel, trans. Oppenheimer, Paul, 2001, New York, pp. xlviix-xlix

からも、執筆者であるボーテがさまざまな話をまとめて執筆したと考えられる。

内容に入る前に、オイレンシュピーゲルについて紹介すると、彼は土地もろくにない貧乏農民の子として生まれ、各地を流れ歩く放浪者で、道化として生きた人物である。ところで、道化師の歴史は古代エジプトまで遡ることができるが、中世ヨーロッパでは、特権階級にある人物が城内に道化としての従者を雇っていたことが確認されており、宮廷道化師と呼ばれていた。しかし、それだけでなく、町や村においても道化は重要な役割を担っていたようである<sup>2)</sup>。人々が身分という階層で隔てられていた封建時代において、道化は特定の身分に属さず、むしろ、最下層以下の賤民に近く、故に、どのような階層とも一体感を持つことなく、自由に付き合う存在であった。彼はある意味では自由人であったと言える。

次に作者であるボーテについて述べておこう。ボーテはブラウンシュヴァイクのハーゲンの市参事会員でもあった鍛冶屋の親方アルントの子として1463年頃、生まれた。1488年1月には徴税書記であったが、この年、ギルド支配を嘲笑した廉で自宅監禁とされ、父と共にギルドから追放された。1490～3年頃、ブラウンシュヴァイクの北パーペンタイヒの下級裁判所裁判官となり、1494～96年には再度、徴税書記に復職し、1513年までその職にあった。1513年にブラウンシュヴァイクで一揆が起り、彼は危うく処刑される寸前まで追い込まれるが、一日捕らえられただけで、一命をとりとめた。1516年から20年には市の煉瓦製造所の管理人となり、1520年に亡くなったとされる。著作には『オイレンシュピーゲル』の他、1293～1516年までのブラウンシュヴァイクの手工業者の蜂起を記した『シヒトブーフ(年代記)』や『車の書』がある。彼は『オイレンシュピーゲル』の序文でも述べているが、ラテン語も十分ではなく、大学へ行ったわけでもなかった。また、彼は「片足(あるいは足なえ)のボーテ」と

して人々に嘲笑されていたようであり、父の職業である鍛冶屋の仕事は身体的に不自由であるため、その職に就くことは不可能であったと考えられる。それ故、父アルントは息子ボーテを市内のラテン語学校へ通わせ、一生食べていけるように徴税書記という市の官職につけてやったと考えられる。彼は手工業の親方の子として職人の世界に身をおいていたことで、恐らく遍歴職人たちから多くの話を聞き、それが後の『オイレンシュピーゲル』の話の種になったと考えられる。ところで、徴税書記は市の財政を支える重要な職務であるにもかかわらず、ブラウンシュヴァイクでは1652年まで身分は賤民に位置し、市民権すらなかったという<sup>3)</sup>。ボーテは職人の子でありながら、親の職を継ぐことができず、生まれながら賤民たる徴税書記の職に就くしかなかった。この自分の人生を、農民の子として生まれながらも、不運な星の巡り合わせて、賤民たる道化者、放浪者となるティルの運命に重ねていったと推測される。

### 3. 『オイレンシュピーゲル』の中に見られるティルと16世紀ドイツの民衆の声

まず、オイレンシュピーゲルの内容を述べながらティルと16世紀ドイツの民衆の声を考察したい。オイレンシュピーゲルは、ティルの生誕から死までの一生を描いたものであるが、ホネガーの分類によると、第1話から第9話までがクナイトリンゲン村の農民の子が母親の希望する職人にならず、放浪者へと成長していく過程が描かれているとする。先ず、物語の始まりは、作者が本を書くことになったきっかけと目標が述べられている。作者は二、三人の者にオイレンシュピーゲルについて書き下すように依頼を受けたが、はじめは「自分にはそれに見合う知識も学識もないし、ラテン語も解せない」と断っていた。しかし、断り切れずに、「神様のお助け」に頼って、引き受け、「一生懸命始めることにした」とし、その後、「この厳しい時代に心楽しく

<sup>2)</sup> 阿部謹也『中世の窓』朝日新聞社、1981年、12頁

<sup>3)</sup> Danckert, W., Unehrliche Leute, Bern und München, 1963, p.266

過ごせるように」「この話を読む人や聞く人がしばしの気晴らしができる」ように、そして出来るだけ多くの人々に読んでもらいたい、という希望が述べられ、最後に「多くの人に読んでもらいたいけれども、礼拝の妨げにならない」ことを追記して本文が始まる。最後の「礼拝の妨げにならない」ようにと気遣っている点に、16世紀の民衆にとって礼拝の存在は大きかったと考えられる。

まず、ティルが生まれ、1日に3回洗礼を受けたという話から始まるが、これは読者にはじめから衝撃を与えるものであろう。1回めは正式にアンブレーベン村に連れて行かれ、そこで洗礼を受けたことが記されている。そして、洗礼を受けた後、出身地のクナイトリンゲン村<sup>4)</sup>へ戻る途中、小川にふとしたことで落とされたのが、2回目であり、3回目は帰ってから大鍋で洗われた時である。わざわざ、3回、洗礼を受けたことを記していることから、まともな人間が2回以上、洗礼を受けるといことは考えられないので、ティルという人間が社会の秩序や常識、慣例などの枠からはみ出した者であることを印象づけている。ただ、洗礼の問題は再洗礼主義との関係から考えると、当時の人の洗礼への考え方は、どのようであったか、考えさせられる。とにかく、この3回の洗礼は、「はじめに」において作者が述べていたように、「厳しい時代」を生き抜いたティルの人生にふさわしく、効果的な登場となっていると考えられる。また、アンブレーベン村とその村の教会は聖エギティウス修道院長のものだったと記されている点から、16世紀初頭当時、修道院長が城主になれるという実態も明かされている。さらに、当時、人々は教会に対して一方で、不満、不平はあったにもかかわらず、他方では彼らの日常生活は教会と共にあったことも分かる。2話から9話までについてであるが、自由を求めるティルの生き方を象徴させる出来事が描かれている。2話では父親が「お前はきっと不運な星のもとに生まれたに

違いないな、お前はじっと座っていて誰にも何もしていないのに皆はお前のことをあくたれだというんだからな」と語るが、貧困な村の土地持ちの農民は乞食、放浪者として各地に流出していた当時の社会情勢をボーテが鋭く観察していたことがわかる。3話では、ティルの母親が、息子が16歳になっても遊び回っているような道化や綱渡りしている姿を厳しく叱責している場面がある。当時、大道芸人は放浪者として賤民に位置づけられていた。ティルの父親は零細とは言え土地を保有し、盗賊騎士<sup>5)</sup>の輩下として農民を下に見るような社会的地位にあり、さらに母親がアン・ヴィブケンという姓をもっていることから、母親の出身が低くなかったことを暗示している。だからこそ、母親は家を継がないのなら、唯一の出世の道である手工業職人になることを息子に望んでいたであろう。他方、16世紀初頭当時の若者は、新しい時代を自由に生きようとしていたことを垣間見ることができよう。5話はまさに、当時の人々の中に教会行事が生活の一部になっていたことがわかる。「この四週間、家にはひとかけらのパンもないんだよ」と歎く母親に、ティルが「そいつはおれのいったこととは関係ないけど、何も食べるものがない貧乏人は聖ニコラウスの日には立派に断食できるさ。もし貧乏人に食べるものさえあればいつだって聖マルチン祭の日のように食べるものだ。」と答えている。ここでは、聖ニコラウスの日も、聖マルチン祭も日常的に話されている点、いかにキリスト教が生活の中に浸透していたかがわかる。ニコラウス一世は節制を守った人として名高く、生まれた時から、一週間ののち、水曜日と金曜日は母親が授乳しようとしても飲

<sup>5)</sup> 盗賊騎士とは中世ヨーロッパにおいて騎士の身分を持ちながら強盗や盗賊を行っていた者達である。彼らは騎士であることが通常の盗賊や強盗との大きなちがいであり、フェーデという決闘制度を悪用して自分たちの強盗行為を合法化していた。多くは戦時には傭兵として戦い平時には強盗を行って生計を立てていた。中世ヨーロッパでは盗賊騎士の多発により交易商人は騎士の縄張りを通るローマ街道を避けて通らなければならなくなった。フェーデを禁止したラント平和令の施行により盗賊騎士は衰退して消えていった。

<sup>4)</sup> クナイトリンゲン村は現在、ニーダーザクセン州のブラウンシュヴァイク市から車で20分ほどのところに位置する。

まなかったという伝説があるほどの人で、だから、食べるものがない貧乏人にとっては毎日がニコラウスの日だとティルは言っているのであり、他方、聖マルチンは貧民に施した人として有名で、その祝日はあひるを屠ってごちそうをし、ニコラウスの日にそなえた教会の行事があり、マルチン祭はたっぷり食べる日で、貧乏人にとっては、食べることさえ出来ればいつでも、マルチン祭だとティルは言っているのである。

10話から21話まで(10, 64, 11, 12, 13, 14, 15, 18, 21話)はティルの少年期となっている。彼は両親の家を離れて貴族、市民、僧侶、農民の下で働くことになる。10話は故郷を離れて一人で放浪することになるが、1番目に選んだ仕事が父親の職業の延長上である盗賊騎士の小姓となっている。次に商人の下で料理人兼暖房係として雇われているが、商人が「わしは教会へ行くからもう顔を見せるなよ」とティルに話している。ここで、当時の人々が教会へ日常的に通っていたことがわかる。さて、いたずらをした彼は「やれやれ、あっしはいつも命じられたとおりのことしかしてないのに、いつも有り難うの言葉一つ聞かれないとは奇妙なことだ。こればかりは確かなことなのだから、あっしはどうせ不運な星の下に生まれたんだ」と言って、商人の家を後にしているが、ここには商人の社会進出も窺える。彼が「不運な星の下に生まれてきた……」というのは、作者自身の思いであるように受け取られる。11話から13話は彼がブラウンシュヴァイク公国のマクデブルク司教区のブーデンシュテットという村の司祭館の下男として雇われ、その後、聖堂世話人となることが記されている。ここでは表向きは敬虔な信仰が貫かれていたとみられる社会とは裏腹に、料理女とオイレンシュピーゲルの馬鹿馬鹿しくちぐはぐなやりとり、そして神聖で厳格な聖職者のイメージを全くないが、憎めない愛すべき脳天気な司祭の姿に、人々は恐らく、大笑いしたことであろう。14, 15話では、愚か者と評されているティルが、マクデブルク市民全体や学者よりも、ずっと愚かであることを発見する話

である。14話はティルが町の人々に空を飛んでみたいと宣言したとき、町は大騒ぎとなることから始まる。彼が市参事会堂の屋根に登っていくと、大勢の人々がその前に集まってくる。そこで、彼は出窓から今にも飛び出そうとするが、その時、自分は阿呆だと思っていたが、この町の多くが自分よりも阿呆だ、自分には羽がないので飛べるはずがない、自分は飛んで見たいと言っただけだと大演説をする。15話では、自分には学があって賢い人間だとうぬぼれ、「阿呆は阿呆を好み、賢者は賢者を好む」という持論をもっていたマクデブルク司教の博士に対して、ティルが一杯食わずという話である。最後に、阿呆と一緒に居ると賢者も馬鹿になると言っていたが、阿呆によって利口になることもあり、愚かな者を知る必要がないほど、賢い人はいない、という結びの言葉に一般民衆である読者はどんなに痛快だったのであろう。

ティルは成長していくが、88話、22話を経て17話までを含む70の話(88, 22, 63, 23～38, 16, 39～41, 43, 46～62, 19, 20, 65～70, 72, 73, 45, 87, 74, 44, 76～86, 75, 71, 17話)は、彼の成人期の話となっている。ティルは、皇帝と選帝侯、諸国王、公、ラントグラフ(方伯)、博士、聖職者、市民、農民、乞食、盗人など広範囲の人々と関わりながら、当時の各階層の人々の腐敗や墮落、また、不平や不満、矛盾などを巧妙ないたずらである行為と言葉によって浮き彫りにしていく。しかも、論駁や口論ではなく、笑いによって展開していく。63話ではティルが眼鏡作りになったものの、どの国でも仕事がなかったという話になっているが、選帝侯たちが互いに争っている当時を風刺しているものとなっている。彼がトリーア司教に次のように話す場面がある。「恵み深い司教猥下、あっしは眼鏡作りでしてブラバント<sup>6)</sup>からきたんですが、あちらでは仕事がないので、仕事を探して遍歴の旅に出たの

<sup>6)</sup> ブラバント公国は、低地諸国にあったかつての公爵領。現在のベルギーのフラムス＝ブラバント州、ブラバン・ワロン州、アントウェルペン州およびブリュッセル首都圏地域、オランダの北ブラバント州を含んでいた。

でさあ。あっしらの仕事は全くのお先真っ暗でね。……全く滅んでしまうかもしれないんですが、それは皆様方、つまり、教皇、枢機卿、司教、皇帝、国王、諸侯、顧問、統治者、町や村の裁判官たちが、今では時には賄賂を受け取って不正をみのがしているためなんですよ。むかしは多くの君主や諸侯が何人にも不正が生じないように法学書を読んで勉強したので、眼鏡がたくさん必要だったと物の本には書いてあるんです。あの頃あっしらの仕事は繁盛していました。その上、聖職者たちまでが今よりはずっと勉強をしていましたから、眼鏡はどんどん売れたんですよ……こうしてあっしらの仕事は左前になってしまって、あっしもあちこちの国を回ってみても仕事にありつけないのでさあ。こうした悪弊は今では農村にまで及んでいて、農夫達までが不正を見逃すようになっていっているんです……。」これは痛烈な教会を含む社会批判となっている。また、眼鏡の売れ行きを通して、宗教改革勃発が経済と無縁なものではないこと、上から下まで皆、愚かな者に成り下がっているという現状をユーモアを交えて示している。28話はティルがボヘミアのプラハ大学で学生と議論し、やりこめたことが記されている。ティルが、ウィクリフがイングランドから異端の教えをボヘミアに伝え、ヤン・フスがそれを広めたボヘミアのプラハ大学で頓知で学長達を打ち負かしたことが記されている。著者ボーテにとっては、フス派は単に異端という認識だけであったのであろうか。とにかく、この話の中で、ボーテが宗教改革運動の先駆者たちであるウィクリフやフスに言及していることは興味深い。ちなみに、ルターはフスについて『卓上語録』の中で「ヤン・フスは霊的に激しく奮い立ち、多くの国、イタリア、ドイツ、スペイン、フランス、英国などに対して、ただ独りで力強い言葉で立ち向かった。彼らの叫び声にただ独りで対抗した。フスの死は報復されていると思う。同じようにわたしも神の思し召しにより生前よりも死後になって真剣に取り上げられよう。<sup>7)</sup>」と言っ

<sup>7)</sup> [マルチン・ルター原著] 植田兼義訳『卓上語録』2003年、教文館、388頁

ているが、ボーテも、ティルを通して、フスのように独りで叫び声をあげたと言えよう。31話にはルターが教会の悪弊に公然と抗議の声をあげるきっかけとなったテッツェル(1470 - 1519)が贖宥状を売ったことを想起させるような話が記されている。ティルが聖遺物を持ち歩く説教師となって、ボンメルン<sup>8)</sup>に行った。彼は村で教会献堂式や結婚式や寄り合いがあると司祭のところへ行き、自分が代わりに説教をして農民達に聖遺物に触れさせ、お布施を受けたら半分は司祭に進呈すると申し入れる。無学な司祭はお金さえ入れば、それで結構ということで話が決まる。ティルは、教会で旧約聖書について話し、さらに新約聖書の話も付け加えながら、言葉巧みに、ノアの箱舟と天のパンの入っている金の壺の関係を告げ、さらに世にもまれな聖遺物として聖ブランダーヌスの頭蓋骨について語った後、実は自分が今、それを持っていることを語る。そしてこれをもって新しい教会を建てるための基金を集めるよう自分は命じられていると言って、人々から献金を集めるという話である。ここでは、ルターの『95箇条の提題』の直接の発端となったテッツェルの贖宥状販売を想起させる如く、ティルが行く先々で説教をするたびに大金が入ってきたことを記されている。但し、テッツェルはライプチヒの正式のドミニコ会修道士であり、教皇レオ10世が1517年に発行した贖宥状の販売をマインツの大司教アルブレヒトが請け負い、この販売をアルブレヒトから任されたのであった。テッツェルは、教皇の紋章の入った十字架を先頭に立て、大々的に贖宥状を売り歩き、その際、民衆の罪意識と煉獄における刑罰に対する恐怖感を煽る言葉巧みな説教により実績を上げていった。ところで、34話と84話に、ティルがローマへ行き、教皇に拝謁した話がある。彼は「ローマへ行け。信仰あるき者よ。戻ればすなわち、役立たず」

<sup>8)</sup> ボンメルンは、ポーランド北西部からドイツ北東部にかけて広がる地域。伝統的、或は地勢的には北にバルト海、東西をオーデル川とヴィスワ川にはさまれた地域である。ちなみに、ルターの協力者で北ドイツ及び北欧の宗教改革に尽力したブーゲンハーゲンはボンメルン出身である。

という昔のことわざを思い出して、ローマへ向かったとある。中世のローマは教会統治の中心であっただけではなく、芸術と学問の中心でもあったが、それ以上に享樂の舞台でもあったようである。現にルターも1510年から1511年にかけて修道会の要務を帯びて、ローマに行っているが、そこで贖宥について疑いをもち始めたと言われている。彼は『卓上語録』の中で、「大金を支給されてローマへ行きたくなかった。自分の目で見なかったら、信じなかったろう。というのは、ローマは背徳や不正が蔓延し、恥知らずで、神も人間も敬われず、罪も恥も無視されていたからである。これは、ローマに滞在したすべての立派な人々が墮落して、イタリアから故郷へ帰った背徳の人々を見れば納得がゆくであろう。わたしのローマ旅行の主要な目的はエアフルトで告解はすでに二回済ませているが、若い時代の総告白をして、正しい人になったからである。ローマの無学の人々の所へ来てしまった。ああ、主なる神よ、多くの公務と国事で目が回るほど忙しい枢機卿もこの憂うべき状態を知るべきではないだろうか。（これに比べて、）日々学び、つねに行を積んでいるわたしたちの努力は賞するに足るであろう<sup>9)</sup>」と述べている。教皇は聖なる年を定め、ローマ巡礼者に贖宥を与えた。このことによって、ローマに多数の人が押し寄せた。教皇は四週間に一度、ミサをあげていたが、この話の中では教皇がミサをあげる日に、ティルは聖堂に入り教皇の傍へ行き、教皇が読誦ミサ<sup>10)</sup>をはじめると、彼は聖体に背を向け、次に教皇が聖杯を祝福すると、また背を向けるという行為をした。そのために、教皇は彼を異端の徒ではないかと疑い、審問した。そこで彼は自分は善良なるキリスト教徒であって、哀れな大罪人であるから、罪を告白するまで聖体を見ることは許されないと考え、背を向けているのだと、嘯いている。当時の異端審問では、審問官が告発者でもあり、

<sup>9)</sup> [マルチン・ルター原著] 植田兼義訳『卓上語録』2003年、教文館、23～24頁

<sup>10)</sup> 従者なしで歌もなしであげられるミサのことで、通常は非公開で行われるので、ティルの異常な振る舞いが目立った。

裁判官でもあった。故に、異端の疑いがあるとされた者は弁護人を期待することはできず、一方的な裁判となり、多くの者が審問を受け処刑されていた。ここでは、ローマ巡礼の軽薄さを暗に示しつつ、また、異端審問についてのあり方についてのボーテの不信が語られていると言えよう。さらに、「こうしてローマ巡礼を有終の美で飾らなくっちゃ」とある84話は、ローマ巡礼から直後の話となっているが、これはボーテの当時の裁判のあり方についての異議がユーモアを混じるながらも唱えられている箇所だと考えられる。すなわち、あくたれだのやくざだという評判はそれが噂にとどまる限り大したことではない。しかし、自分の目で確かめたわけでもない人物についての悪評をうのみにすることへのボーテの憤りが窺える。ここでの登場人物である旅籠の女主人にティルは、オイレンシュピーゲルについて問う。すると彼女は、会ったことはないけど、とびきりのやくざ者だということは聞いていると言う。そこで、彼は「会ったこともないのにどうしてやくざ者と言えるのか」と言って反論し、最後に彼女にいたずらをしてから、「さあ、オイレンシュピーゲルはやくざ者だといってもいいよ」と伝える。当時、ブラウンシュヴァイクでは7名の者が「あの男はやくざ者だ」と言いさえすれば、それが何の証拠に基づいてなくても裁判にかけて有罪判決を下すことができた。この訴訟手続きはまず放浪者やよそ者に適用され、オイレンシュピーゲルなどはその代表的な犠牲者であった。このような状況の中で、ティルは何よりもまず自分で目撃し、体験したことについて語るように女主人との出来事を通じて訴えているとみられる。このように当時、人々に賤しまれていた道化となって、時には宮廷の道化として諸国の国王にいっぱい食わせたり、司祭や親方、学者、果てはローマ教皇至るまでからかいの的とする自由奔放なティルの行動は、変化への焦燥感をもった16世紀の人々には痛快だったのだと思われる。

89話から95話まではティルの老年期と死

とに至る話になっていて、舞台はメルン<sup>11)</sup>である。ティルは生まれるとき、悲惨にもどぶ川におちて泥まみれになったが、死ぬ時も、彼の棺は豚によってひっくり返されるという滑稽さと悲惨さが同居しているように描かれている。93話から95話までに埋葬について三つの異なった叙述がみられるのも、三回洗礼を受けたティルの出生時に呼应しているように思われる。93話にはティルの遺産を三つに分け、ひとつは友人に、ひとつはメルンの市参事会に、ひとつはその司祭に与えるという遺言状を作ったことが記されている。財産は皆、ティルが大きな箱に仕舞っていて、彼が死ぬまでだれも開けてはならないことになっていた。埋葬が済むと、人々は彼が多くの国を旅していた事を知っていたので、さぞや多くの貨幣や装飾品が入っていると期待した。しかし、箱のふたを開けると、中には灰色の石ばかりであった。ティルの友人達は市参事会員が貨幣をこっそり盗んで代わりに石を容れておいたのだと考える。他方、市参事会員はティルの友人達が夜の間に金を盗んだのだと考える。さらに、司祭はティルの友人達と市参事会員が自分をだましてからかおうとしているのだと考える。三つ巴の争いとなり、皆、朝になるまでののしりあい、殴りあったと記されている。以上、この話は道化であるティルがこの世を去る最後の最後まで人々をからかい続けたという話になっている。

ついでながら、13話は教会での復活祭劇の練習風景を大勢の者が見学していたことがわかり、当時の人々が復活祭をいかに楽しみにしていたかが推察できる。また、18話ではマタイによる福音書13章12節「持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまで取り上げられる」という箇所を用いて話が展開している。これはティルを通して、ポーテが、商業によって富の増殖が可能になった当時の市民の経済生活の原理をあらわしたものであろう。すなわち、市民権をもっていない職人、徒弟や財産、資本を持たない者には富を積む可能性は

ない、ことを示している。ティルはもちろん、市民権をもっていない者の部類の者であり、ここでは買ったパンを犬に取られてしまう。「さあ、パンを持てる者にはパンが与えられんと言うあの格言が嘘だと言うことがよく分かったぞ。俺はパンを持っていたが、それまで取られてしまった」と彼は結ぶ。しかし、さらにティルの聖書理解がマタイによる福音書13章12節の後半部分、「持っていない人は持っているものまで取り上げられる」というところまで、読みこなししていないという愚かさ、市民権をもっていない者の二重の現状を表すことを著者ポーテは意図していたのではないかと考えさせられる。ところで、ポーテ自身の本音がわかる箇所がある。21話でティルは人々と一緒にいるのを好んだが、子どものいるところは好まなかったとあり、その理由として、子どものいたずらの方が可愛らしいので人々がティルよりも子どもの方に注目するからとある。恐らく、ポーテ自身も子どもが苦手だったのではないだろうか。すなわち、彼は足なえ、あるいは片足であったことで、まず、遠慮ない子どもが彼を嘲笑していたのではないか、だからこそ、このような叙述がなされているのではないかと考えられる。以上、民衆本『オイレンシュピーゲル』を通して、16世紀初頭のドイツの人々の生活の座に根ざした生の声、そして著者ポーテの矛盾に満ちた社会への不満や不信の叫びが聞こえてくるように思える。

#### 4. 『ティル・オイレンシュピーゲル』と宗教改革運動の接点

ここでは、『ティル・オイレンシュピーゲル』と宗教改革運動の接点という視点から考察してみよう。先ず、ヘルマン・ポーテの出身であり、ティルの生誕地であるブラウンシュヴァイクという町と宗教改革運動の接点を考えてみよう。ブラウンシュヴァイクは12世紀に北ドイツ一帯を支配したハインリヒ獅子公<sup>12)</sup>の居住地として栄えた。獅子公は早くか

<sup>11)</sup> 北ドイツにあり、リュベックからリュネブルクへ行く途中の小さな町である。

<sup>12)</sup> ハインリヒ獅子公 (Heinrich der Löwe, 1129年 - 1195年8月6日) は、神聖ローマ帝国の領

ら商業のもたらす富に着目し、はじめから商業目的で都市を建設していった。彼は住民には税を低く抑え、一時的利得よりも都市繁栄による領内経済向上をねらう長期的展望にたって北ドイツ各地に都市建設をしていったので、ブラウンシュヴァイクも都市の発展と商業は抜きに出来ない関係だったと言える。故に、都市建設の原動力となったのは商人層であった。一般に手工業者層の地位は低かったが、中世末には彼らも政治参加を求め、暴動が発生するようになり、いわゆる、ツフット闘争が起こった。ブラウンシュヴァイクでは早くも1374年から86年にツフット闘争が起こっている。そして、ボーテ自身も一揆の犠牲となったリュデケ・ホラント率いる一揆は、1488年に起こっている。この一揆は、市参事会が流入してくる悪貨からブラウンシュヴァイク全市の経済を守るために、外貨に対して新しい交換比率を設けた貨幣条令を突然、出したために起こったものであった。この条令の内容を全く知らされていなかった市民から不満の声があがり、毛皮商でザック市長であり、全市の市参事会員であったリュデケ・ホラントが中心となって、いくつかのツフットが一揆を起こしたのだった。そしてこのような状況下で手工業の親方たちが市政を掌握することになったのである。

他方、ヴィッテンベルク大学でルターとメランヒトンに学んだ聖エギディウス聖堂の若い修道士であったゴットシャルク・クルーゼ (Gottschalk Kruse) が1522年より、ブラウンシュヴァイクにおいて、ルターの教説を説いて回り、人々に強い支持を得ていった。彼は特に一般の人々に分かりやすく語りかけていた。これに対して市参事会員たちは、ブ

ラウンジュヴァイクでの騒乱と大変革を恐れ、ルターの教えを積極的に学んだ。他方、統治者である厳格なカトリック支持者のハインリヒ2世 (Heinrich II., 1489 - 1568) はこの運動を阻止しようとした。しかし、彼らの運動の盛り上がりを見かねたハインリヒ2世は止めることが出来なかった。ついに、1528年に、ブラウンシュヴァイクの都市では宗教改革を行うことになった。ブラウンシュヴァイクでは神学的指導をってもらうために、ルターの同労者で、ヴィッテンベルクの牧師でもあったブーゲンハーゲン (Johann Bugenhagen: 1485-1558) を招聘した。同年、ブラウンシュヴァイク市参事会の牧師であったH. ヴィンケル (Heinrich, Winkel) により、ブーゲンハーゲンは「市のすべての教会の共通の牧師、説教者」に任じられた。彼は、同市で説教者、聖書解釈者、牧会者、教育者、法律問題の助言者、共同審理者、組織作成者として多方面の活動をした。しかし、特に彼が行い、またこれ以降の彼の活動の核となった仕事は、教会規定作りだった。先ず、彼が教会規定を作成し、それを市参事会員、市参事会員に選ばれうる14のギルドの長たち、5市の行政区民の28人の代表等により確認され、1528年9月6日、全市の教会でこの規定を導入することになった。こうして、ブーゲンハーゲンの尽力もあり、ブラウンシュヴァイクは、宗教改革を市参事会と牧師の協力の下に組織的に、またそれを行政に組み込み、制度化しながら実践していった。

では、『オイレンシュピーゲル』を通して、宗教改革運動と一般民衆の接点について考えてみよう。『オイレンシュピーゲル』は16世紀を通してドイツだけで少なくとも35版も出版された<sup>13)</sup>という点から見ても、どれだけ、多くの人から支持され、また普及したかがわかる。また、印刷所についてはグリーンンガーが出したのが初版とされている。このグリーンンガー (Johannes Grüninger) はグーテンベルクの下にいた印刷職人であり、シュトラスブルクのグリーンンガー印刷所は当時、

<sup>13)</sup> Hermann Bote, Till Eulenspiegel, Frankfurt am Main, 1978, p.17

邦君主の1人で、ザクセン公 (ハインリヒ3世、在位：1142年 - 1180年)、バイエルン公 (ハインリヒ12世、在位：1156年 - 1180年)。1180年に従兄の神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世に2つの公領を奪われるまでは当時最も権力を持ったドイツの君主の1人だった。最盛期には北海及びバルト海沿岸からアルプス山脈まで、ヴェストファーレンからボンメルンまでの広大な領土を統治した。ハインリヒは自身の政治的、軍事的な洞察力と4人の祖父母の遺産によって強大な権力と領地を獲得した。

有力な印刷所であった<sup>14)</sup>。グリーニング印刷所では16世紀初頭には3年から5年、通常4年おきに各出版物の版を重ね、初版部数は少なく抑え、売れ行きが良ければすぐに2刷を出していくという販売方法だった。この点からも35版も印刷を重ねた『オイレンシュピーゲル』がどれだけ、人気があったかが想像されよう。では、なぜ、それだけの支持を得られたのだろうか？

既述のとおり、一般庶民のつぶやきを代弁しているとみられる箇所は多々ある。たとえば、22話では一兵卒としてティルが伯のお供をすることになるが、彼はできれば、逃げたい気持で、敵に向かうときはいつでもびりびりで、帰る時は先頭なので、伯は彼を解雇してしまう。この時、彼は喜び、毎日、敵を渡り合うのは性に合わないと記されている。当時、一般の者は戦いがあると駆り出されていたと思われるが、この徴兵に対する人々の本音が語られていることがわかる。ティルはさまざまな階級の人々にいたずらをしているが、ティルが引掻き回しているのは、彼らがそれぞれの階級ごとに持っているちっぽけな矜持やプライドであり、彼らがしがみついている知識であった。ティルは、彼らを散々な目に合わせながら、「それが、どれほどのものだっていうんだ」と啖呵をきっている。それほどまでに、人々は自分が他の人と少しでも違うというところを見せたがり、わずかばかり手にしているものをさも自慢そうに見せびらかしたがるのである。ティルは、そういった人々の鼻っばしらを次々と折っていくのだが、常々そういう人々に苦い思いをさせられている庶民たちにとっては、ティルの行った数々のいたずら話は、どれほどか痛快に思えたことだろう。この他、既に述べてきたように（本稿「3.『オイレンシュピーゲル』の中に見られるティルと16世紀ドイツの民衆の声」）、宗教改革が行われる当初、庶民たちはそれぞれ、上に立つ権威者—ローマ教皇、聖職者、領主、学者、貴族、等—の腐敗、不誠実に対する不満、不平、怒り等があったこと

がわかる。彼らの叫びが、ルターの宗教改革運動の普及の一端を支えていったのだと考えられよう。

ここで、『オイレンシュピーゲル』の考察を信仰との点から検討してみると、疑いなく当時の人々にとって、キリスト教信仰と生活の座である教会は切り離せないものであったことがわかるが、実際、ブラウンシュヴァイクなど当時の都市を考えてみよう。都市は商業と手工業を基盤とする政治・経済の共同体であるが、他方、キリスト教共同体でもあった。『オイレンシュピーゲル』の話も、先ず生まれた時、教会から始まり、死ぬ時も教会で終わっていることから、このことが裏付けられる。当時の人々は自分の魂の救いを求めつつ、ローマ巡教、ミサ出席、免罪符購入等するが、一向に自分の今いる状況は良くなるはず、だからこそ、ティルの滑稽な話によってお互いの現状を笑いあい、共感しあったのではないだろうか。当時の人々は一方では、貨幣を媒体にして進展していく商品経済の論理があった。従来、教会は商業活動そのものを蔑視し、商人が天国へ入るのはラクダが針の穴をくぐるよりも難しいと主張してきたにもかかわらず、その教会が腐敗し、貨幣経済に組み込まれていった。その中で、人々の倫理観は崩れていき、不安定な心理状態にあったのであろう。それをティルの話を読み、共通の話題にしたりして、笑って紛らわせていたのかもしれない。もちろん、商業都市では、商人の地位は高く、市参事会を構成する商人の家柄がほぼ独占的に市政を掌握していた。しかし、彼らも、一般の人々と同じく、キリスト教共同体の中に組み込まれていた。つまり、当時の人々は、世俗生活と霊的生活の2つの次元に身を置いていた。こうした状況を見事に描いたのがこのヘルマン・ボーテの『オイレンシュピーゲル』の世界であると考えられる。上記で述べたように、ブラウンシュヴァイクでは市参事会員たちがルターの教えを学び、普及に努め、ついには、市参事会が正式にルター派に移ることを決定している。商人として有能であっただけでなく、政治家としても辣腕を振っていた彼らは、人間の力、経験、

<sup>14)</sup> Hermann Bote, Till Eulenspiegel, trans. Paul Oppenheimer, New York, 2001, p.lxxiv

富だけに頼っていたかもしれない。彼らはツンフトによる一揆により民衆の力を知り、他方、権威者や聖職者の腐敗、墮落、強欲を目の当たりにし、ルターの教説を学ぶことで、人間というものが信じがたい存在であること、欲にとらわれ、神を見失っていたことに目覚めた。彼らは信仰義認を説くルターの新しい教えを支持し、不安、不満、不信の中にある民衆の先頭に立っていったのではないだろうか。

さて、宗教改革の結果、ハンザ圏の大部分はルター派を取り容れた。興味深いのはティルの遍歴旅行先<sup>15)</sup>がハンザ同盟の大部分と重なり、かつ、ルター派に改宗した都市と重なっていることである。この地域の宗教改革運動は14世紀以来の市民闘争と絡んで進展した。当初、都市支配層はプロテスタントに敵意を示したが、手工業者を含めて中・小市民層はプロテスタントを支持した。プロテスタントは急速に普及し、都市支配層も結局はこの情勢に妥協するほかなかった。1525年のリューベックにおけるハンザ総会ではルター派禁圧

が決議されたものの、この決定に従う都市は少なく、改めて同年2回目の総会が開かれ、宗教問題は各都市の自由な決定に任されることとなった。たとえば、ティルも訪れたリューベックは宗教改革によって大きく動揺した都市であった。リューベックの支配層がプロテスタント化を恐れたのは経済的理由にも基づいていた。彼らの一族からは教会有力者も出ていて、その地位や収入が失われるからであった。しかし、プロテスタント化は勢いを増し、1528年にはプロテスタントの信徒の市民委員会が成立し、市当局もプロテスタントの説教を許すほかなかった。折しも1531年にはブラウンシュヴァイクを指導したブーゲンハーゲンがリューベックで布教に努め、プロテスタント教会を確立した。他方、東方ではドイツ騎士団が宗教改革を機としてプロテスタント教国家として再出発した。ハンザ圏で広まったのは主としてルター派であるが、プロテスタント教会各派でも不寛容は著しかった。ルター派は本質的な社会革命をねらうものではなく、カルヴァン派や再洗礼派を危険分子として敵視した。ブレーメンで1563年にカルヴァン派が勝利を占めたとき、ハンザ総会は同市を除名している。

上記のようにオイレンシュピーゲルと宗教改革運動の接点を考察してきたが、宗教改革が起こる原因となる16世紀初頭のドイツにおけるキリスト教共同体の中でのさまざまな問題を『オイレンシュピーゲル』は私たちに再現していると言えよう。また、ハンザ都市と宗教改革運動の普及、そしてハンザ都市とオイゲンシュピーゲルの関係は注目に値すると思われる。著者ボーテはハンザの中でも重要な位置を占めるブラウンシュヴァイクの出身で、同市の徴税書記である。さらにオイゲンシュピーゲルの舞台となるものも主としてハンザ都市であり、デンマーク、ポンメルン、アントワープなどハンザにとって重大な利害関係をもつ都市であった。また、カトリック教会に関係する都市ローマ、フスの宗教改革に関係する都市プラハ、ルターに関係するアイスレーベン、エルフルトにもオイレンシュピーゲルが出向していることからみて

<sup>15)</sup> オイレンシュピーゲルの旅した都市は、ブラウンシュヴァイク (1, 16, 56, 19, 45 話) ザーレ川付近 (2~5 話)、シュタスフルト (6~10, 83 話)、ヒルデスハイム (64 話)、ブーデンシュテット (11~13 話)、マグデブルク (14, 15, 18, 21 話)、アインベック (88, 47 話)、ヴィッテラウ (63 話)、デンマーク (23 話)、ポーランド (24 話)、ツェレ (25, 26 話)、ヘッセン国 (27 話)、ボヘミアのプラハ (28 話)、エルフルト (29, 60, 61 話)、チューリンゲン (30 話)、ポンメルン (31 話)、ニュルンベルク (32, 77, 17 話)、バンベルク (33 話)、ローマ (34 話)、フランクフルト・アム・マイン (35 話)、クエドリンプルク (36 話)、エゲルスハイム (37 話)、リュゼンブルク (38 話)、ロストック (39, 40, 50, 81, 82 話)、ヴィースマル (41, 43, 46 話)、ベルリン (48, 54 話)、ブランデンブルク (49 話)、シュテンダル (51 話)、アッシャースレーベン (52, 53 話)、ライプツィヒ (55 話)、リューベック (57, 58 話)、ヘルムシュテット (59 話)、ドレスデン (62 話)、ユルツェン (20, 68 話)、ヴィースマル (65 話)、リュエネブルク (66, 67, 96 話)、ハノーファー (69, 71 話)、ブレーメン (87 話)、ハンブルク (74, 44, 76 話)、アイスレーベン (78 話)、ケルン (79, 80 話)、シュタスフルト (83 話)、ある町 (84, 75 話)、フランクフルト・オーダー (85 話)、アントワープ (86 話)、マリエンタール (89 話)、メルン (90~95 話) である。

も、この話と宗教改革運動の接点は非常に関係が深いものと考えられる。

## 5. まとめ

ルターが宗教改革運動を始める同時期に、主として北ドイツで自由に、かつ、彼なりの正義を貫くティルの物語『オイレンシュピーゲル』が創刊された。以来、この民衆本が多くの人に支持されたことは、当時の人々がどのように考えていたか、その本音を知ることができる有力な手がかりの一つであると考えられる。さらに言えば、ボーテの描き出した世界は宗教改革の勃発当時の一般社会を風刺と笑いをうまく使いながら、生き生きと表していると言えよう。ルターが民衆の福音理解のため、聖書のドイツ語翻訳や、ドイツ語の讚美歌を作ったように、ボーテは「この話を読む人や聞く人がしばしの気晴らしができますように私は心から願っています。・・・この書物は出来るだけ多くの人々に読んでいただくために書かれたものです」と記しているように、16世紀初頭のドイツの社会における不条理、不満、怒りを多くの者と分かち合おうとした意欲作と言えよう。ルターのローマ教会との闘いはそれまでの教会のあり方を根底から揺るがすものであったが、本稿では、民衆本『オイレンシュピーゲル』及び、その著者ボーテの生涯を検討していくことで、政治的、社会的、経済的な16世紀ドイツ初頭におけるさまざまな現実問題を浮き彫りに出来、他方では当時の人々の変化への焦燥感が信仰的な運動であり新しい教説を説く宗教改革運動へ期待し、かき立てていったのではないかという一考察が出来たと考える。

【尚、本論文は2014年9月9日に日本キリスト教会第62回学術大会で発表したものを見直し、加筆、訂正したものである。】

### 《一次史料》

Hermann Bote, Till Eulenspiegel, 1978, Frankfurt am Main  
Hermann Bote, Till Eulenspiegel, 2012,

### Hamburg

Hermann Bote, Till Eulenspiegel, trans. Paul Oppenheimer, 2001, New York

[ヘルマン・ボーテ原著]『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』阿部謹也訳、1990年、岩波書店

[ヘルマン・ボーテ原著]『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』藤代幸一訳、1987年、法政大学出版局

### 《参考文献》

Dankert, W., Unehrliche Leute, 1963, Bern und München

Dieter Diestelmann, Braunschweig; Kleine Stadtgeschichte, 2006, Regensburg

Dieter Diestelmann, Braunschweig, 1999, Büge Cell

Giesela Buddée, Braunschweig, 2009, Hamburg

Herbert Blume, Hermann Bote, 2009, Bielefeld

Sven-Friedrich Pape, Hermann Bote: Das Schichtbuch - Aufstände im mittelalterlichen Braunschweig, 2010, Norderstedt

阿部謹也『中世の窓』1981年、朝日新聞社

阿部謹也「民衆本『ウーレンシュピーゲル』を読む」『欲ばしき学問』1980年、岩波書店、p.9-34

阿部謹也「民衆本『ウーレンシュピーゲル』を読む」『社会史とは何か』1989年、筑摩書房

阿部謹也「民衆本『ウーレンシュピーゲル』を読む」『社会史とは何か』2000年、筑摩書房

高橋理『ハンザ「同盟」の歴史』2013年、創元社

藤代幸一『記号を読む旅：ドイツ中世文化紀行』1986年、法政大学出版局

[デア・シュトリッカー原著]藤代幸一編訳『司祭アーミス』1987年、法政大学出版局

[マルチン・ルター原著]植田兼義訳『卓上語録』2003年、教文館

『ルター』（世界の名著23）松田智雄編、1979年、中央公論社



# キリスト教主義園における保育方針の具現化 —ある主任保育者へのインタビュー分析より—

鈴木 幸子

## I 問題と目的

キリスト教主義の幼稚園や保育園（以下、キリスト教主義園とする）は近年、幼稚園が全国幼稚園数の10%<sup>1</sup>、保育園が2008年からの4年間で約50園増加<sup>2</sup>している。キリスト教主義園は、日本の保育の創成期から現在においても、重要な働きをしているといえるだろう。

キリスト教主義園における保育実践は、新キリスト教保育指針によれば「子ども一人ひとりが 神によってのちを与えられた者として、イエス・キリストを通して示される神の愛と恵みのもとで育てられ、今の時を喜びと感謝を持って生き、そのことによって生涯にわたる生き方の基礎を培い、共に生きる社会と世界をつくる自律的な人間として育つために、保育者が イエス・キリストとの交わりに支えられて共に行う 意図的、継続的、反省的な働きである」<sup>3</sup>を指す。つまり、キリスト教主義園では、キリスト教精神を具現化（具体的に表す）した保育実践が行われているといえるだろう。

キリスト教主義の保育実践にかかわる研究ではこれまで、キリスト教主義園の特色<sup>4</sup>、園で歌われる讃美歌<sup>5,6</sup>、合奏<sup>7</sup>、聖書に基づいた子どもへの視点<sup>8</sup>、時代の変化に伴う課題や不易の課題<sup>9</sup>など保育内容の検討がある。

一方、保育実践を担う保育者について報告や検討がある。キリスト教主義園の保育者は、クリスチャンの割合が1981年の調査では47.8%であったのに対し、2004年の調査では27.2%になり、この20年間にクリスチャンである保育者は減少しており<sup>10</sup> ノンクリ

スチャン保育者の働きは大きい。この現状に対して、キリスト教主義の養成校における教育内容や学生の意識<sup>11,12,13,14</sup>が検討され、新キリスト教保育指針<sup>15</sup>はノンクリスチャン保育者を意識して記述<sup>16</sup>し、園と教会との連携の努力<sup>17</sup>も求められている。また、ノンクリスチャン保育者の中には、教会には行かないがキリスト教に関心があるキリスト教シンパが存在している<sup>18</sup>ことや、ノンクリスチャン保育者がキリスト教主義の保育を行うことによる発達の寛容<sup>19,20</sup>や宗教意識の寛容<sup>21</sup>も明らかになっており、ノンクリスチャン保育者がキリスト教に目を向けつつ、保育を行っているといえるだろう。しかし、現実には礼拝や祈り、讃美歌、聖書の話などキリスト教的行為が表面的に行われるといったキリスト教主義の保育の形骸化が危惧され<sup>22</sup>ている。多くのノンクリスチャン保育者とクリスチャン保育者が協働する現在、キリスト教主義の形骸化への対応、つまり、キリスト教主義を具現化する保育を検討することは重要な課題といえよう。

保育実践においてキリスト教主義の具現化を考える際にはまず、保育の根幹となる保育方針に着目する必要があるのではないか。保育方針は、各園が幼稚園教育要領・保育所保育指針等を踏まえた上で、それぞれの園独自のものが作られている。保育方針は園の全職員が共通理解し、指導計画に反映され、日々の保育実践で具現化されるものとして重要である。また、保育方針は、園の説明書に記されたり、園内に掲示されたりすることも多いため、日常的に目につきやすく、上位の幼稚園教育要領・保育所保育指針よりも身近なものであることから、保育者がより実践に取り

入れやすいと考えられる。このため、保育方針に注目することはキリスト教主義の具現化を検討する際にふさわしいと考える。

以上から、本研究では、キリスト教主義園のキリスト教を反映した保育方針がどのように保育に具現化されるのかについて検討することを目的とする。

その際、主任保育者を対象にインタビューを行う。主任保育者は、保育実践のサポートや、保育者のスーパーバイザー、園長のサポートなど複数の役割を行う。園長は対外的な職務が多く、担任保育者がクラスの責任者であるため、主任保育者は、園運営と具体的な保育実践を見渡す立場にあり、保育方針に立ち返る機会が多いと考えるからである。

また、それぞれの園によって保育方針、教育課程・保育課程、歴史などに多様性があり、各園における保育実践もそれらの影響を受ける。そのため複数の園の主任を対象とせず、ある特定の園を対象とする必要がある。本研究では、特定の園に長期間在職し園全体を把握している一人の主任保育者を対象とし、保育方針の具現化を詳細に明らかにすることで、結果を今後の他園との比較検討やキリスト教実践検討の基礎としたい。

## II 方法

### 1, 協力者

東京都、教会に附属するキリスト教主義幼児教育施設 A 園の K 主任保育者を対象とした。A 園は、1962 年の設立からインタビュー当時で 50 年の歴史をもつ。A 園は 3 歳児、4 歳児、5 歳児クラスの各学年 1 クラスずつで、3 歳児 15 名、4,5 歳児各 25 名程度で構成されている。保育に当たる職員は、園長(牧師)1 人、主任保育者 1 人、担任保育者各学年 1 人、フリー保育者 1 人の計 5 名。園長は通常、園から少し離れた教会に在籍。K 主任保育者は、A 園に 36 年間継続勤務。そのうち、担任保育者として 21 年、主任保育者として 15 年勤務している。

### 2, 調査時期、方法

2012 年 8 月に A 園にて K 主任保育者にインタビューを行った。インタビューは半構造化面接で行った。主な質問項目は、保育方針を保育実践にどのように具現化しているのかである。インタビュー時間はおよそ 1 時間。話の内容は、K 主任保育者の了解を得て IC レコーダーで記録した。尚、分析は話の内容の中から保育方針の具現化に関連した考えや想いを対象とする。

### 3, データの分析

調査によって得られた保育方針の具現化に対する考えや想いを逐語化した後、大谷<sup>23</sup>による SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いて分析した。分析は、4 ステップのコーディングが基になる。逐語化したものをセグメント化した後、まずデータの中の着目すべき語句を抽出、次にそれを言いかえるためのデータ外の語句、さらにそれを説明するための語句、そしてそこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコーディングを行い、それを基にストーリー・ラインを作成し、最後に理論記述を行った。ここでの理論とは、普遍的で一般的に通用する原理のようなものではなく、「このデータから言えること」である<sup>24</sup>。

## III 結果

### (1) A 園の保育方針

#### A 園の保育方針 (一部抜粋)

キリスト教の福音を土台にしつつ、園児の心身を伸展させる保育 ～見えないものを見る目、聞こえないものを聴く耳、形ないものに触れる心を大切にする保育～

A 園は設立当初、保育方針は「キリスト教の福音を土台にしつつ、園児の心身を伸展させる保育」のみであったが、K 主任保育者が主任に就任した年に、これまでの保育で大切に語り継がれてきたことを外部により伝わり易くするために、「見えないものを見る目、聞こえないものを聴く耳、形ないものに触れ

る心」等を追加している。これは、園のパンフレットに掲載したり、入園説明会で説明したりしている。

(2) ストーリーライン

SCAT分析したものを表1に示した。ステップ4「構成概念」から以下のストーリーラインを作成した。なお、構成概念は下線で示した。

<ストーリーライン>

主任保育者は、保育方針の具現化をどのように考えているのか

A園の保育方針は、その本質を被包感として、具体的に言語化したものと考えられる。保育方針の具現化は、教育課程に明示されるキリスト教的行為と、生活の中に明示されない埋め込まれた行為でなされる。具現化に重要なのは保育者キリスト教志向かどうかではない。子どものキリスト教観を未来志向しつつ、時に悩みながらも形骸でなくかつ無形支持的な保育者の保育観である。その保育者の保育観の生成には以下の二点が重要だと考えられる。一点目は、保育のねらいを子どもたちが自己・他者肯定感を獲得することに置き、保育者自身が自己肯定感をもって子どもにかかわることである。自己肯定感をもつか否かは保育者の資質により差があり、違和感や困難感のある保育者に対しては、主任が思想明示や普遍性伝授に努める。二点目は共同の学びである。保育者らがキリスト教志向しつつ、共に穏やかな準備や教材利用した学びを行うことで保育観の生成だけでなく価値受容力が育つ。

(3) (2)のストーリーラインについて理論記述を行った。

理論記述について保育方針の具現化に着目して分析したところ、3つに分類することができた。以下に3分類と各理論記述を示す。

<理論記述>

1分類 保育方針の解釈
<ul style="list-style-type: none"> <li>• A園の保育方針の本質を主任保育士は、被包感と捉えていると考えられる。</li> <li>• 無形支持的な保育観を大切にしている。</li> </ul>
2分類 保育方針の具現化の方法
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 保育方針の具現化は、キリスト教的行為の中と日常の園生活の中で行われる。つまり、園生活全てで具現化されている。</li> </ul>
3分類 保育方針の具現化に重要なもの
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 具現化に重要なのはキリスト教志向かどうかではない。</li> <li>• 具現化に重要なものは、子どものキリスト教観を未来志向した保育者の保育観である。</li> <li>• 保育観の生成に重要なのは、保育者の自己肯定感と共同の学びである。</li> <li>• 自己肯定感をもつか否かは保育者の資質がかかわると考えられる。</li> <li>• 保育者の自己肯定感に対して違和感や困難感がある場合には主任保育者が働きかける。</li> <li>• キリスト教を志向した共同の学びには、穏やかな準備と教材利用した学習がある。</li> <li>• 共同の学びは、保育観の生成と価値受容力が育つ可能性がある。</li> </ul>

IV 考察

本研究では、キリスト教主義の保育方針がどのように保育に具現化されるのかについて検討するため、A園のK主任保育者に対してインタビューを行った。結果、K主任保育者の保育方針の具現化についての考えは、理論記述において、「保育方針の解釈」、「保育方針の具現化の方法」、「保育方針の具現化に重要なもの」に分類できた。以下分類ごとに考察する。

1「保育方針の解釈」

A園の保育方針の本質を主任保育者は、被包感と捉えているようである。被包感とは、ボルノウ<sup>25</sup>が教育的雰囲気として重要であるものを示したうちのひとつであり、子ども

が教育者から庇護されていると感じること（被包感）とを指す。本研究の場合、K主任保育者は、保育者と子どもが神から庇護されていると感じるという、被包感を重要だと述べているのではないだろうか。K主任保育者は保育方針の捉えについてテキスト3（表1）で、「神様の愛の中で子どもを愛すること」、「教会の幼稚園であるってそのことが神様の愛の中で過ごすんだって、それだけで」と述べている。子どもだけでなく、保育者自身も神の愛に包まれている、つまり被包感の中で保育することを大切にしているといえるのではないだろうか。保育方針「キリスト教の福音を土台にしつつ、園児の心身を伸展させる保育」は被包感を本質としていると考える。江村・鈴木<sup>26</sup>は、保育者の宗教意識の調査において、保育者が神から庇護されている被包感があることを明らかにしており、今回の結果と同様だと思う。キリスト教主義園の保育者は被包感をもつことが特徴なのかもしれない。

また、無形的なものを大切にする保育観は、「見えないものを見る目、聞こえないものを聴く耳、形ないものに触れる心を大切にする保育」が反映されていると思われる。保育方針の本質と考えられる被包感が、現実世界には見えない、聞こえない、触れられない無形的なものだからである。

## 2 「保育方針の具現化の方法」

保育方針は、礼拝や祈り等のキリスト教的な行為と、それ以外の生活の中で具現化されるという。ここでいう礼拝とは、クラス毎行う礼拝ではなく、全学年が集う合同礼拝を指す。礼拝は教育課程の中で内容が明確になっている。毎週同じ曜日、時間、場所、順序で行われ、御言葉は保育者の言葉を使い、前週との連続性を持ちながら伝えられる。保育者は礼拝を意識的に行っており、子どもも園生活の他の部分と異なるものと感じているだろう。その意味で礼拝は明示的な行為としての保育方針の具現化である。一方、礼拝以外の日常の園生活においても保育方針が具現化されているという。ここでは、生活の何気ない

場面で歌う讃美歌の例が挙げられた。ある讃美歌に「いつもいつも神様と一緒に」という歌詞がある。保育者は、現実には見えない、聞こえない、触れられない神様がいつも一緒にいるというメッセージを、生活の文脈や状況に合わせて子どもたちと歌っているという（テキスト8、表1）。保育行為は保育者が瞬時に状況を判断し意図したものであり、保育者からすれば明示的な行為である。しかし、子どもにとっては今の自分の状況に沿った保育者の自然な行為である。礼拝を明示的とするれば、今ここの子ども自身の状況に沿っているものは、生活に埋め込まれた暗黙的なものといえるだろう。保育方針は、明示的にも暗黙的にも具現化されているといえる。

## 3 「保育方針の具現化に重要なもの」

保育方針の具現化に重要なものは、クリスマスカードとかではない。保育者の保育観だという。その保育観は、キリスト教主義の保育が子どもの未来のキリスト教観に影響するという未来志向である。

その保育観の生成には、自己肯定感や共同的学びが影響する可能性があるという。

まず、保育者の自己肯定感についてである。K主任保育者はテキスト21（表1）で「聖書の中に互いに愛し合いなさいってあるじゃないですか、互いに愛し合いなさいってというのは、人を愛すためには、自分のことを愛せない。自分のことが好きであって、自己肯定感をもっているかいなかによって、どんなに優秀であっても違うと思います。」と保育者の自己肯定感が重要であると語っている。続けて「神様はみんな一人ひとり良しとしているんだよっていうそこから始まるんですよ。」と話した。創世記において神が人を造られ、よしとして人がはじまったように、キリスト教主義の保育は、保育者が神様に保育者自身も子どもも、よしとされていることを受け入れ、互いに愛し合うことを基礎として行われると考える。互いに愛し合うことを実現する様相は、K主任保育者がテキスト10・18で述べているように、子どもへのまなざし現れるのだろう。保育者の自己肯定感に違

和感をもった場合は、K主任保育者が礼拝の時に子どもたちと同時にその保育者に向けても話し、キリスト教の考え方を伝えている。ただし、その保育者の受け止め方には自由を持たせている。神に委ねているのではないだろうか。

加えて重要なのは、共同的な学びである。ひとつは、毎朝保育が始まる前に、保育者が皆で祈りを合わせて心穏やかに準備をする中に、子どもへのまなざしを整える学びがあるのだろう。もうひとつは、保育者らがキリスト教を志向しつつ、子どもや自分自身の保育を振り返る学びである。その際、拠り所のひとつとしてしているのが、キリスト教保育という教材である。乳幼児の園生活での事例をキリスト教の視点から解説する等の内容が掲載されている。この教材が保育実践を多角的に理解しようとする時、複数の保育者らとの読み合わせや意見交換がキリスト教の視点の学びを促すという。つまり、キリスト教を志向した園内研修が、保育者の保育観の生成に寄与する意味で重要だと考える。

## V まとめ

以上の考察から、キリスト教主義園の保育方針の具現化について、次のようにまとめられる。

- A園の保育方針は、保育者に実践経験と結び付けて解釈され、その本質を「被包感」と捉えられていると考えられる。
- A園の保育方針の具現化は、礼拝や祈りなどのキリスト教的行為による明示的な具現化と、それ以外の生活に埋め込まれた暗黙的な具現化でなされている。
- A園の保育方針の具現化に重要なものは、クリスチャンか否かではなく、保育者の保育観である。
- A園の保育者の保育観は、子どもの未来のキリスト教観を志向した無形的なものである。
- A園の保育者の保育観の生成には、保育者の自己肯定感と共同の学びが影響する可能

性がある。

- 保育者の自己肯定感は、互いに愛し合うことの基礎となり、子どもへのまなざしに現れる。
- K主任保育者は、保育者の自己肯定感に疑問を感じた場合、当該保育者へキリスト思想明示や普遍性の伝授をするが、当該保育者の受け取り方は自由である。
- A園の保育者の保育観の生成には、キリスト教を志向しつつ共同的に学ぶ、園内研修が重要である。

これらは、A園のK主任保育者による保育方針の具現化に対する考えや想いであり、一般化できない。しかし、園全体に一定の責任をもつ主任保育者が、保育方針を、実践知を持ち込みながら理解し、保育者の自己肯定感に影響するように働きかけ、園内研修を行い、保育者の保育観を生成し続けることが、キリスト教精神に基づいた保育を支える可能性を示唆していると考えられる。

## VI 今後の課題

本研究の課題として2点挙げる。1つは、対象を主任だけでなく、園の保育者ら複数による合同のインタビューを行うことである。保育方針を園の保育者らがどのように捉え、クラスでどのように具現化しているのかを明らかにすることが必要である。2点目は、対象園を広げて比較をすることである。各園の相違点や共通点を明らかにすることは、キリスト教主義園全体の理解に寄与すると考える。

## 引用文献

- 1 幼稚園数については、2012年の調査におけるキリスト教の幼稚園数1,382園と、全国幼稚園数13,170園の比較である。キリスト教の幼稚園数は、キリスト教年鑑編集委員会編『キリスト教年鑑2013』キリスト教新聞社、2013年、277-321頁。全国幼稚園数は、文部科学省『学校基本調査—平成24年度（確定値）結果の概要』

- [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2012/12/21/1329238\\_2\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2012/12/21/1329238_2_1.pdf) (2014年7月16日取得)
- 2 キリスト教の保育所数増加については、キリスト教年鑑 2009年版の479園と2013年版の536園の差である。キリスト教年鑑編集委員会編『キリスト教年鑑 2013』キリスト教新聞社、2013年、322-339頁。キリスト教年鑑編集委員会編『キリスト教年鑑 2009』キリスト教新聞社、2009年、822-843頁。
  - 3 キリスト教保育研究委員会『新キリスト教保育指針』社団法人キリスト教保育連盟、2010年、23頁。
  - 4 渡辺のゆり(2006). キリスト教保育園の特色について プール学院大学研究紀要, 46, 129-143.
  - 5 多保田治江(2013). キリスト教保育の幼稚園・保育園でうたうさんびか 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, (6), 65-78.
  - 6 多保田治江(2012). 英和幼稚園でうたわれたさんびか 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, (5), 27-33.
  - 7 吉田若葉(2007). 幼児の礼拝における賛美としての合奏に関する実践報告: 5歳児での実践(クリスマス) 北陸学院短期大学紀要, 39, 105-121
  - 8 出村るり子, 千場瞳, 橋本綾華(2010). 北陸学院第一幼稚園におけるキリスト教保育の実践 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, (3), 13-23.
  - 9 松浦弘樹(2014). 保育の実践的課題の省察: 1990年以降キリスト教保育の場が掲げてきた課題を概観して 和泉短期大学研究紀要, (34), 51-58.
  - 10 深谷潤(2010). 「キリスト教シンパ層」の存在意義と課題--キリスト教保育者養成の視点を中心に キリスト教教育論集(18), 79-87.
  - 11 片山知子(2014). キリスト教保育の授業内容における一考察: 「聖書物語」を劇にして演じること 和泉短期大学研究紀要, (34), 39-42.
  - 12 松尾裕美(2014). キリスト教保育の現場における聖話のあり方: 子どもの心に残る神様のお話し 西南女学院大学紀要, 18, 207-215.
  - 13 吾田富士子, 大長司(2013). 「キリスト教保育」の開設と保育学科生の意識: 子どもに伝えたい聖書の言葉の分析から 藤女子大学人間生活学部紀要, 50, 73-87.
  - 14 広渡純子(2012). キリスト教保育の現状と課題: 保育者養成校における「キリスト教保育」: 聖和短期大学の例 キリスト教教育論集, (20), 114-117.
  - 15 キリスト教保育研究委員会(2010). 『新キリスト教保育指針』社団法人キリスト教保育連盟
  - 16 深谷潤(2011). 「ノンクリスチャンによるキリスト教保育の課題—「キリスト教シンパ」とキリスト教的空間—」西南学院大学人間科学論集, 7(1), 141.
  - 17 東義也(2007). キリスト教保育の現場における保育者の信仰と理解について 尚絅学院大学紀要, 54, 127-137.
  - 18 深谷潤(2011). ノンクリスチャンによるキリスト教保育の課題--「キリスト教シンパ」と「キリスト教的空間」西南学院大学人間科学論集, 7(1), 139-162.
  - 19 鈴木幸子, 江村綾乃(2012). 新任保育者はキリスト教保育をどう捉えているのか: 就職前のインタビューの分析から 日本質的心理学会第9回大会プログラム抄録集, 2012
  - 20 鈴木幸子, 江村綾乃(2013). 新任保育者はキリスト教行事をどう捉えているか キリスト教教育学会第25回発表要旨集録, 18-19.
  - 21 江村綾乃, 鈴木幸子(2014). キリスト教保育における保育者の園での役割と宗教意識の関連 キリスト教教育学会第26回発表要旨集録, 40-41.
  - 22 東義也(2007). キリスト教保育の現場における保育者の信仰と理解について 尚絅学院大学紀要, 54, 127-137.
  - 23 大谷尚(2008). 4ステップコーディン

グによる質的データ分析手法 SCAT の提案  
－着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き－ 名古屋大学大学院教育発達科学

研究科紀要（教育科学）, 54, 2, 27-44.

24 大谷尚 (2011). SCAT: Steps for Coding and Theorization –明示的手続で着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法–, 感性工学, 10, 3, 155-160.

25 ボルノウ, O. F. (訳) 森昭・岡田渥美 (1993). 教育を支えるもの 黎明書房, 30-45.

26 江村綾乃, 鈴木幸子 (2014). キリスト教保育における保育者の園での役割と宗教意識の関連 キリスト教教育学会第 26 回発表要旨集録, 40-41.







## キリスト教における「食」教育の実践例とその意義についての検討

桜の聖母短期大学 木下 ゆり

## 1. はじめに

国際連合食糧農業機構（FAO）は、世界の飢餓は減少傾向にあるものの、未だ約8億500万人（およそ8人に1人）が、健康で活発な生活を送るための十分な食料が得られず、慢性的な飢餓の状態にあると報告している。飢餓に苦しむ人々の大半は開発途上国に住んでいるが、今後、極度の貧困による飢餓や栄養不足を軽減するには、経済成長ではなく農業の成長による雇用の創出が有効だと言われている（FAO, 2014）。

我が国に目を向けてみると、第二次世界大戦後、高度経済成長を経て国民の生活水準は著しく向上し、栄養不足の時代から一転して「飽食」の時代を迎えている。その結果、肥満や生活習慣病の増加、食べ残しや食品ロス<sup>1</sup>、食料自給率の低下など、戦前には想像できなかったような問題が起きている。このような食料をはじめとする資源の分配の不均衡や、地球上の限られた資源・生命の無駄遣いを一日も早く止めるために、我々はどうすればよいのだろうか。地球上のあらゆる生命を尊重し、共生できる持続可能な社会を目指し、社会、地域、家庭、個人の全てレベルで具体的に行動を起こすことが求められていると言える。

このような状況を踏まえ、未来を担う子どもたちの「食」の教育を法制化する動きが日本では始まっている。2005年には内閣府が「食育基本法<sup>2</sup>」を制定、2011年には「第2次

食育推進基本計画<sup>3</sup>」を発表し、各自治体が中心となって「食育」が展開されている。また厚生労働省から「保育所における食育に関する指針」が提示され、保育所・幼稚園の現場では、乳幼児期からの「食」の支援に取り組んでいる。子どもたちの「食」の教育を推進するにあたっては、食の専門家である管理栄養士・栄養士がリーダーシップをとり、保護者、保育士、幼稚園教諭、学校教諭、調理師、調理員、ボランティア、地域住民などと連携していくことが重要である。

管理栄養士・栄養士の果たす役割が期待される中、私はキリスト教主義の短期大学（静岡英和学院大学短期大学部、桜の聖母短期大学）の栄養士養成課程で「栄養教育」「食育」の分野の教育に携わっているが、大学の建学の精神である聖書、讃美歌、各種行事に日々触れていると「食べ物」「食事」が頻繁に登場し、また大切にされていることに驚く。しかし、実際には栄養士の授業や現場では、全くキリスト教の要素がみられないのが現状である。本来、宗教は人間がどう生きていくべきか、与えられた命をどう生きるか、といった個人の生き方やよりよい社会生活を送るための示唆を与えるものであり（西谷, 1954）、地球上の「食」の問題を解決するための糸口になる可能性もあるのではないだろうか。

そこで本研究では、キリスト教において「食」はどのような意味をもち、何を伝えよ

等における食育、地域における食生活の改善の取り組み、生産者と消費者との交流促進、食文化の継承のための活動支援などを定めている。

<sup>3</sup> コンセプトは「周知」から「実践」へで、次の三つの「重点課題」が掲げられている。①生涯にわたるライフステージに応じた間断ない食育の推進②生活習慣病の予防及び改善につながる食育の推進③家庭における共食を通じた子どもへの食育の推進。

<sup>1</sup> 本来食べられるのに廃棄されているもの。農林水産省2011年度推計によると日本では、年間約1,760万トンの食品廃棄物を排出し、このうち約500～800万トンが食品ロスと推計されている。世界全体の食料援助量の約2倍になる。

<sup>2</sup> 施策の基本的方向として、家庭や学校・保育所

うとしているかを確認し、キリスト教における「食」の教育の事例をまとめ、その意義について考察する。なお、現状として非キリスト者の栄養士・保育者が多いため、その視点から分析する。研究方法としては、主に文献による調査を行った。

## 2. 聖書の時代の食べ物と食習慣

### (1) 聖書に登場する食べ物と飲み物

聖書が書かれた時代には、イスラエルの民が住んだ土地には食べ物も水も少なかった。その時代に古代の人々が食べていた食べ物や飲み物は次の通りである。旧約聖書には、穀類（大麦、小麦、裸麦）、パン、水、オリーブ油、乳・凝乳・チーズ、肉類（牛、羊、山羊、鹿、家畜、豚）、魚、いなご、鳥、卵、レンズ豆・そら豆、ぶどう酒、果実（りんご、ぶどう、いちじく、ざくろ）、蜜、ナッツ類（ピスタチオ、アーモンドの実）、野菜、香辛料、塩、マナなどが登場する。新約聖書も旧約聖書とほぼ同様で、穀類（大麦、小麦）、パン、水、オリーブ油、肉類、魚、いなご、鳥、卵、ぶどう酒、いちじく、蜜、野菜、香辛料、塩などが登場する（奥田、2002）。

その中でも、キリスト教信仰に深く関わり、象徴的に使われている食べ物として、パン、ぶどう酒、魚がある。特にパンは、毎日の生活に欠かせないものとして、キリスト教の教えの中で重要な役目を果たしてきた。パンはイエス・キリストの体、ぶどう酒はイエス・キリストの血、魚はキリスト教信徒・信者を表している。

なお、食べ物や食方に関する推奨・禁止内容、信者・信徒の信仰と深く関連する部分については、本研究の目的から少し離れるため、敢えて触れないでおくこととする。

### (2) 聖書の中の食習慣体験

聖書の食べ物を題材にした「食」教育の例として、「聖書の中に登場する食べ物を食べる」「聖書の時代の人々の食習慣を体験する」「古代のレシピをもとに料理をする」などがあげられる。

食習慣体験としては、肉を食べるのは安息日のお祭りの時だけであったため、普段の食事のパターンとして「パンとオリーブの実」、「パンとチーズ」、「パンと果物（生またはドライ）」といったシンプルな食事内容を体験する。飲み物は「水」、「ミルク」、「薄めたぶどうジュース（ぶどう酒の代わり）」のいずれかを飲む。料理体験としては、夕食に食べることが多い「スープ」を実際に作って食べることもできる。スープの作り方は、小麦、大麦、ひよこ豆、空豆、レンズ豆などを長時間煮込んだ濃いスープに野草などを加えて塩で味付ける。その他の古代の簡単な夕食の例として「カッテージチーズ（1カップ）、緑オリーブと黒のオリーブ（種抜きまたは千切り 各6粒）、刻んだピスタチオ（塩なし1さじ）、刻んだセロリ（1さじ）、刻んだケーパー（1さじ）」混ぜ合わせて皿に盛り、上からピスタチオとセロリを飾り、トマトやサラダと一緒に出す（S. ガスタルディ他、2012年）。

新約聖書に書かれているイエス・キリストが食べていた食べ物は、現在の地中海料理<sup>4</sup>に非常に似ていると言われている。地中海調理は和食と同様に非常にヘルシーであり、生活習慣病の予防や改善に効果が期待される。イエス・キリストにならった食事内容と習慣を行う事例としてD. コルバートの『キリストは何を食べていたのか?』を参考にした。（D. コルバート、2007）

【イエス・キリストにならった食事内容と習慣にするには】

- ①加工品・甘い菓子をやめる。
- ②全粒穀類・新鮮な果物・野菜・豆・ナッツ・低脂肪ヨーグルトを食べる。
- ③バター・マーガリン・ドレッシングをやめてオリーブオイルに替える。
- ④肉は赤身の獣肉より、魚肉か家禽の肉を、

<sup>4</sup> 「スペイン・イタリア・ギリシャ・モロッコ4カ国の地中海料理」として、2010年にユネスコの世界無形文化遺産に登録されている。「和食」は2013年に登録された。他に「フランスの美食術」「メキシコの伝統料理」「トルコのケシケキ（麦がゆ）料理」の食文化が社会的慣習として登録されている。

少量食べる。

- ⑤朝食を欠かさずにとる。
- ⑥昼食か夕食に赤ワインを楽しむ。
- ⑦昼食はくつろいだ雰囲気周囲とおしゃべりして笑いながらとる。
- ⑧昼食の前か後に、友だちと散歩する。
- ⑨軽い間食をとる場合は、果物・無糖ヨーグルト・低脂肪のカッテージチーズにする。
- ⑩夕食は早目にとり、少量ずつ皿数が多い食事にする。
- ⑪定期的な運動と、歩くことを増やす。

食べ物、食習慣、料理体験学習の進め方としては、古代の人やイエス・キリストはどんな物を食べていたかどんな味がするかを想像したり、食べた後に感想や気づいた点などについて話し合う。限られた種類の昔ながらのシンプルな食べ物や飲み物を、五感を使って味わい、当時の人の気持ちを想像したりすることで、目に見えない恩恵に気づき、感謝する気持ちを育むことにつながる。さらに、聖書の中の食事と、現在の自分の1日の食事の写真や献立を比較することにより、自分の生活を振り返ることができる。

### 3. 共に食事をする

新約聖書には、イエス・キリストが食事をする場面が数多く出てくる。徴税人や罪人など当時の社会では疎まれていた人、貧しい人、身体の不自由な人、目が見えない人を招き、共に食事をしている。また、自分にとって都合のよくない人であっても、相手を認めて受入れて共に食事をしている。食事をするには、人間が生きるための栄養を摂ること以上の意味があり、食べる行為を通して共にいる人と新たな関係性を築くことができる。「共に食事をする」ことは、共同体における一致の印でもあり、イエス・キリストの愛を受けることを意味する。(関谷, 2013)

また、十字架にかけられたイエス・キリストが三日目によみがえり弟子たちの前に現れた時の「復活したイエスが魚を食べる話」(ル

カ:24:33-43)では、「食べ物を食べること」が本当に「生きていること」の証であることを伝えている。

「食」教育の事例としては、みんなで一緒に料理をし、楽しく会食し、後片付けをする。さらに、野菜や果物の収穫から仲間と一緒に行うと、より深い学びとなる。

### 4. 分けあって食べる

キリスト教の特徴のひとつに、その場にいる人のことを覚え、祈るといふことがある。特に、食べ物を分配したり、食事をする時は、博愛と助け合いの精神によって食べ物を分け合うことが行われている。『なぜ食べるのか聖書と食』によると、聖書の時代には「麦畑、ぶどう畑、オリーブ園等の収穫時には、貧しい人々を救済するために収穫物を完全に取り尽くさず、取り残す工夫がされていた」「収穫物の10分の1は、神の物として奉納させ、経済力を持たない人々のためのものとした。政治的な配慮がされていた」という(奥田, 2002)。「食」教育としてどのように展開するかは、具体的な事例として小学校とアメリカで始まったフードバンクの活動を以下に示す。

#### (1) パンと牛乳の日

キリスト教教育を行っている神奈川県横浜英和小学校では、聖書の時間と礼拝と並んで「パンと牛乳の日」を設けている。この日はいつも食べている自分の食事を減らし、残りを世界の誰か他のお腹を空かしている人と分け合う活動をしている。

〈学びの特色 キリスト教教育「パンと牛乳の日」〉

「もう一人の友達のために、月に一回、『パンと牛乳の日』を設け、給食のおかずやデザートを我慢して生み出したお金で、フィリピン・カンボジア・ウガンダ・ボリビアなど、アジアやアフリカ、南米の子どもたち16人を、日本国際飢餓対策機構を通し、里子として支援しています。1987年度から始まった、本校の歴史ある活動の一つです」

(横浜英和小学校, 2015)

## (2) フードバンク活動

「フードバンク活動」は、包装の印字ミスや賞味期限が近いなど、食品衛生上問題がないが、通常販売が困難な食品を、各地に設立されているフードバンクへ寄付し、生活困窮者等の支援に活用する活動である。アメリカで約50年前に生まれ、日本では2000年頃から開始され、現在全国40箇所で開催されている。(農林水産省, 2015)

## 5. 食べ物への感謝

キリスト者、非キリスト者に関わらず、キリスト教教育の学校、保育所、幼稚園、寄宿舎などの子どもたちが体験する「食」教育の事例として、最も身近なのが「食べ物への感謝」の祈りなどである。キリスト教では、食べ物は神からの「恵み」「祝福」とし、食前・食後の祈り、讃美歌、お話の中で、その思いを伝えることが多い。

### (1) こどもの食前・食後の祈り

食前・食後の祈りを通して伝えられるこども用のメッセージの例をみると、食べ物は「神からの恵み」でありそのすべてに「感謝する」という内容である。具体的には「与えられる食べ物、食事に感謝する」「おいしいお食事をありがとうございます」「好きなものも嫌いなものもみんな感謝します」「世界中に食べ物や飲み物をたくさん下さってありがとうございます」「すばらしい贈り物」といった言葉で表されている。また、食べ物が食卓に届くまでの過程にも目を向けることもあり「太陽や雨を送って下さり」「畑に穀物を実らせて下さいます」などの言葉で表される。(表1)

また前述のとおり、キリスト教の祈りの特徴の「みんなで分けあいます」という博愛の精神や、食べ物が十分に届かない人たちのことを覚えて祈ること、「心と体を満たす」という精神的な充足感について触れる場合もある。

### (2) こどもの讃美歌・聖歌

礼拝や行事の中で歌うこどもの讃美歌・聖歌には、食に関わるものがみられ、表2に例を示した。こども讃美歌のうち21番、22番、23番、59番、聖歌の5つのパンは、礼拝の洗礼・主の食卓・聖書をテーマにした歌詞であり、信仰についての部分となる。101番、102番、聖歌の食前のお祈りは、食べ物の恵みに感謝する歌であり、野菜、米、果物など食べ物への感謝の他、お百姓さんへの感謝について触れている。また、一人占めせずみんなで分かち合うことについても触れられている。

### (3) こどものためのお話の例

お祈りと歌以外に、食べ物に感謝する「食」教育として、キリスト教視聴覚センターの『お話とアイデア集Ⅻ』から事例の一部を紹介する。(上林 他, 1992)

【題名】11月 食べ物、着物をありがとう

【ねらい】食べ物や着物を与えてくださる神さまに日ごろから感謝できるよう導く。

【指導のポイント】

- ・(中略) 飽食の時代のこどもたちが、食物も衣服も高級品嗜好になってきている。その中でこどもたちはわがままを言っていないだろうか。〇〇から与えられるものは素直に受け、感謝の心が育つように導きたい。
- ・「ありがとう」が自然に言えるよう、折りにふれて助言してゆきたい。

【アイデア】

- ・私たちの身体には何が必要か、話し合うことを目標とする。
- ・こどもの嫌いな食べ物を言ってもらい、その絵を黒板に描く。それについて話し合いながらどんな食物にも栄養があることを伝える。こどもに解りやすく楽しくなるよう工夫する。
- ・時には一緒に食べてみるのもよい。

【話の内容(一部抜粋)】

「(中略) 野菜は体によい食物です。どれもこれも大事な栄養がたくさん入っています。〇〇がお料理してくださったものは、みんな

おいしいごちそうです。何でも食べるとみんなの身体は丈夫に大きくなってゆきます。このいろいろな野菜は、雨や太陽の光を受けてなるのですから、無駄なものは一つもありません。みんな色や味が違うからおいしいので

すね。こんなにいろいろなものをくださる神さまにありがとう、そしてお料理をしてくださる〇〇にもありがとうを忘れないようにしましょうね。(略)

表1 食前・食後の祈りの言葉の例

1. 神様、今日もおいしいお食事をありがとうございます。神様が私たちに下さった全てのものに感謝します。好きなものも嫌いなものもみんな感謝します。
2. 神様、世界中に食べ物や飲み物をたくさん作って下さってありがとうございます。世界中のあちこちで子どもたちはお祈りしてお食事をいただきます。
3. 天のお父様は、みんなに食べ物を下さいます。太陽や雨を送って下さいます。畑に穀物を実らせて下さいます。神様。お恵みをありがとうございます。
4. たくさんのおいしい食べ物をつくって下さった神様、並べたお食事がみんなの心と体を満たすことができますように。
5. 毎日食べ物を下さる神様、このお食事によって私たちの心が喜びと感謝で満たされますように。
6. 神様、すばらしい贈り物をありがとうございます。このおいしいりんごもみかんもみんなで分けあっていただきます。
7. 日々の祈り(食前の祈り) 父よ、あなたのいつくしみに感謝してこの食事をいただきます。ここに用意されたものを祝福し、わたしたちの心と体を支える糧としてください。わたしたちの主イエス・キリストによって、アーメン。
8. 日々の祈り(食後の祈り) 父よ、感謝のうちにこの食事を終ります。あなたのいつくしみを忘れず、すべての人の幸せを祈りながら、私たちの主イエス・キリストによって、アーメン。

1-6: おしょくじのいのり, 2010 7-8: 日々の祈り, 2012

表2 A: こどもさんびか B: こども聖歌

A:21 番「にひきのさかなと」(洗礼・主の食卓)	1 二ひきのさかなと 五つのパンを、イエスさましゅくして わけました。 2 おとなも子どもも なかよくすわり、みんなでいっぱい たべました。 3 さいごにのこった さかなとパンは、十二のかごから あふれます。 4 せいしよのこぼを しんじる人に、主イエスのちからが あふれます。
A:22 番「キリストがわけられた」(洗礼・主の食卓)	キリストがわけられたパンにかんしゃ。主の愛がみんなを 友だちにする。
A:23 番「あのよる しゅイエスが」(礼拝 洗礼・主の食卓)	1 あの夜 主イエスが 十二のでしらと さいごのしょくたくを かこんだときに(くりかえし) 主はパンを手にとり かんしゃをささげ それをさきながら わけあいました 2 あの朝 主イエスが ガリラヤのきし よろこぶでしたちと であったときに(くりかえし) 3 あの夜 主イエスが エマオのやどに 二人でしたちと とまったときに(くりかえし)
A:59 番「コップのみずや」(聖書の歌)	1 コップの水や パンのかけらも 分けあうときは ゆたかな食事 2 目には見えない パンだねだけど おいしパンの ふくらむ力 3 一わのすずめ 一本のかみの毛も 神さまは数えて 守って下さる
A:101 番「はたけにおやさい」(収穫感謝)	1 畑におやさい 田にお米 木にはくだもの 実る秋 2 実りの秋です うれしいな 天の神さま ありがとう
A:102 番「わたしたちのたべるもの」(教会の一年 収穫感謝)	1 わたしたちの食べるもの 田んぼのお米もおやさいも 光をおくり 雨をふらせ 育ててくれたのは神さま かんしゃしましょう 神さまありがとう 2 わすれちゃいけない それは つくってくれた人のこと 土をたがやし たねをまいて 大事に育ててくれました おひゃくしょうさん ありがとう ありがとう 3 大事なこのしゅうかくは 分かちあっていただくもの 空をひとりじめできないように みんなのものだよ 食べ物は分かちあいましょう かんしゃの心で
B: 聖歌 五つのパン	5つのパンと2匹の魚 一人の少年 捧げました イエスさま それを皆にわけて 五千の人が満たされました
B: 聖歌 食前のお祈り	おいしいごちそうきょうもまた おあたえくださるかみさまに みんなでおれいをもうします おいしいごちそういただいて ころもからだもすこやかに おそだてくださいイエスさま

## 6. 食に関わるキリスト教の暦（年中行事）の事例

過越祭は、エジプトの奴隷であったイスラエル人が解放された歴史を記憶するための祭である。子羊の丸焼きに苦菜を添えて食べるのは、奴隷生活がとても辛かったことを思いやるためである。また、酵母の入っていないパンも食べるが、祖先たちが大急ぎで出発したためパン生地をふくらませる時間がなかったからと言われている。「食」教育の事例として、これらの料理を作ってみんなで食べる。

復活祭（イースター）は、受難と死を通して復活したイエス・キリストを記念する日で、卵が使われる。卵がイースターに結び付けられるようになった要因は、古代から卵は「よみがえる新しいいのち」「永遠のいのち」などの象徴であったからと言われている。「食」教育の事例として、イースターエッグ作り（ゆで卵にシールをはる、食紅でカラフルに絵を描く、カラーセロファンで包む）、エッグレース、エッグ探し、いのちについて話し合う（誕生、成長、死）、二十日大根など成長の早い種子や球根を育てるなどを行ったりする。

聖霊降臨日（ペンテコステ）は、イエス・キリストが死からよみがえった後、50日目に弟子たちが聖霊を受け、生まれ変わったように元気になった日である。弟子たちが熱心に祈っている時に神様から大きい力（聖霊）を与えられたこと、祈りが大切なこと、たくさん試練がきても強くなって乗り越え勇気をもって進めるようになることを伝える。「食」教育の事例として、大きなクッキーを焼き、全員でそれを分けて食べる。

収穫感謝の日は、収穫をくださった神様に感謝する日。神様によって与えられた収穫を感謝することと同時に、隣人への分かち合いの心をもてることを目的にする。1620年に、イギリスの清教徒がアメリカ大陸に渡り新生活を始めたが、収穫もなく人口も半数に減るという苦闘があった。しかし先住民の友情を得て、豊かな収穫物を得ることができたため、神様に感謝の礼拝をささげ、先住民の友情に感謝したのが始まりである。「食」教育の事

例として、野菜、いも、果物、米などを子どもたちが育て収穫・観察・料理し、他の人にプレゼントする。

クリスマスはイエス・キリストの誕生を祝う日である。約4週間前のアドベント（待降節）の期間は、克蘭ツ（ろうそく）、カレンダー、ツリー、クリブ（馬小屋の飾り）、プレゼント、ページェント（キリスト降誕の劇）などの準備をする。「食」教育の事例として、ブッシュ・ド・ノエル、シュトーレン、フルーツケーキ、ジンジャークッキーなど、クリスマスに食べる各国の料理やおやつについて調べ、作ってみんなで食べる。

平和聖日は、1945年8月15日の終戦前に、広島・長崎の原爆投下とその犠牲者を覚え、平和を祈る日である。日本キリスト教団が8月6日の直前の聖日を平和聖日と制定した。戦争体験を風化させることなく平和の尊さを教え、人々を愛し、いのちを大切にすることが平和につながることを理解させるために、戦争体験者の話や世界で戦争や貧困で苦しんでいる子どもたちの話を聞き、いのちの大切さや他人へのおもいやりを持つことを知る。「食」教育の事例として、戦争中の食生活（いも、いものつる、よもぎ、あわ、ひえなど）を実際を作って食べたり、家族が1日に食べる食材と水を、戦争中と現在の両方用意し比較する。

## 7. 考察

聖書には、食べ物、食べ方、育て方、食習慣、食事のとり方、食に関わる奇跡の話など、多くの「食」に関する話題が登場していた。「食」を通して、神と人間との関係性が問われたり、神からの様々なメッセージを受け取ったりすることもあることが明らかになった。「食」教育の視点からみたキリスト教における「食」のメッセージは4点に絞られた。「恵みに感謝する」「食物・食事を大切にすること」「共に食事をする」「分けあって食べる」ことの重要性である。いずれも日本古来の価値観や風習でも言われているメッセージではあるが、「分けあって食べる」「共に食事をする」

という部分は「博愛」「正義」の意味が強く、キリスト教ならではの「食」教育の特徴であることが示唆された。

今後の課題として、キリスト教主義の保育・教育環境にいる非キリスト者でも実践できるキリスト教の要素を取り入れた「食」教育のプログラムの開発を目指していく。

<引用文献>

*The State of Food Insecurity in the World, 2014.*  
FAO. pdf.

上林順一郎 他. (1992)『お話とアイデア集Ⅻ』pp.131-135. キリスト教視聴覚センター.

奥田和子. (2002)『なぜ食べるのか—聖書と食』日本キリスト教団出版局.

カトリック中央協議会. (2012)『日々の祈り改訂版 第二版』

シルヴィア・ガスタルディ/クレール・ムザッティ著. 石崎美香子他共訳. 柴田ひさ子監訳. (2012)『マンガ聖書の時代の人々と暮らし』pp.10-11 バベルプレス.

関谷義樹. (2013)『カトリック生活 2013年10月号』ドン・ボスコ社

西谷啓治. (1954)『風の心—宗教と人生』毎日ライブラリー.

日本キリスト教団出版局. (2013)『こどもさんびか改定版』

ドン・コルバート. (2007)『キリストは何を食べていたのか?』. pp.229-234. ビジネス社.

ドン・ボスコ社. (2010)『おしょくじのいのり』

<インターネット>

横浜英和小学校ホームページ (2015.1.19 アクセス)

<http://www.yokohama-eiwa.ac.jp/shougakkou/education/religion.html>

農林水産省フードバンクホームページ (2015.1.19 アクセス)

[http://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku\\_loss/foodbank/index.html](http://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku_loss/foodbank/index.html)

<参考文献>

河野友美. (1986)『食べものからみた聖書』日本基督教団出版局.

河野友美. (1989)『続 食べものからみた聖書』日本基督教団出版局

教師の友編集部編. (2012)『CS わいわいアイデア集』日本キリスト教団出版局  
社団法人キリスト教保育連盟. (2013)『新キリスト教保育指針』

上智大学キリスト教文化・東洋宗教研究所. (2007)『主と食卓を囲む—聖書における食事の象徴性』. リトン.

鈴木道子 他. (2011)『子どもと行事』. 社団法人キリスト教保育連盟.

深谷潤. (2011)『ノンクリスチャンによるキリスト教保育の課題—キリスト教シンパとキリスト教的空間—』. 西南学院大学人間学論集. 第7巻. 第1号. 139-162頁. 2011.

ロバート・フェイビング著. 石井朝子編訳. (2005)『イエスの食卓 祈りと分かち合いのヒント』. pp.10-11. ドン・ボスコ社.



2014年度 チャペルとキリスト教行事	
3月	卒業礼拝：山北宣久牧師（前青山学院院長）「Go, go, go in Peace. Be Strong」（13日10時半～） 教職員全体会：山北宣久「「キリスト教主義学校の課題」（同日13時～14時半）W303
4月	礼拝（毎週水曜日） 始業礼拝・武藤元昭学長「信じるということ」（3日） 伊勢田奈緒「運命なんて…」（9日） スチューデントトリトリート（天城山荘一泊、伊豆三津シーパラダイス）（大学11～12日／短大12～13日） 柴田敏先生「隣人を自分のように愛せるか」（16日） イースター礼拝：伊勢田奈緒「捜している人が捜された日」（23日） 伊勢田奈緒「トマスに対してイエス様は？」（30日）
5月	武藤元昭学長「信仰による義」（7日） 学生礼拝：「わたしにとってトリトリートは…」大石萌夢（人間1年）小澤光佑（人間1年）車麗虹（人間1年）仁藤澁貴（人間1年）紅林亜香里（現コミ1年）マリア・ルイサ（現コミ1年）森下静流（コミ福1年）柿島萌里（コミ福1年）杉山竣也（食物1年）（14日） 黒沼由利子（静岡YWCA会長）「平和を実現する人」（21日） 伊勢田奈緒「感謝と感動」（28日）
6月	柴田敏先生「隣人のために祈りましょう」（4日） クレイナー先生「Making Excuses」（11日） 山田美代子先生「小さな者を一人でも軽んじないように」（18日） 伊勢田奈緒「愛は奇跡を起こす」（25日）
7月	第7回ワンコインコンサート開催（2、3、4、7、8日） 学生礼拝：「大学生になって3ヶ月」寺西穂華（人間1年）深澤凜（人間1年）水谷正典（人間1年） 呉昌毅（現コミ1年）松田梨紗（現コミ1年）（2日） 武藤元昭学長「愛の厳しさ」（9日）
8月	
9月	武藤元昭学長「キリストに倣う」（24日）
10月	伊勢田奈緒「心に喝！」（1日） 柴田敏先生「神様がいないとしたら、誰に愛を習うのか」（8日） 学生礼拝：「今、これから」飯泉直哉（コミ福2年）坂本陽香（コミ福1年）青木貴（コミ福1年）大村未来（人間1年）李性眩（人間1年）宮本礼花（現コミ1年）LE THE OANH MAI（現コミ1年）山崎小百合（食物1年）（8日） ハリントン先生「Coincidence in Australia」（22日） 伊勢田奈緒「山椒は小粒でもびりりと辛い」（29日） 第6回クリスマスカードコンテスト（応募期間：1～30日）
11月	谷口ジョイ先生「Jesus loves me」（5日） 武藤元昭学長「いつも輝いて」（12日） 伊勢田奈緒「恋人よ、美しい人よ、さあ、立っておいで」（19日） 創立記念礼拝：関川泰寛牧師（大森めぐみ教会牧師・東京神学大学教授）「愛という贈り物を大切にしたい」（26日） 楓祭に参加（クリスマスの部屋【グロリア】宗教部+学生有志）（9、10日） クリスマス・イルミネーション点灯（11月26日～）
12月	第8回ワンコイン・クリスマスコンサート開催（4日、8、9日） 学生礼拝：「来年へ向かって」武田友里（コミ福1年）松井慶乃（コミ福1年）田中淳也（人間1年）水谷正典（人間1年）THET THET AUNG（人間1年）（3日） 柴田敏先生「命のパン」（10日） クリスマス礼拝・クリスマスメッセージ：伊勢田奈緒「イエスと共に昨日も今日もいつまでも」、クリスマス劇『賢者の贈り物－ISEDA劇団版』（三代目ISEDA劇団【浦田真奈（コミ福2年）他有志学生】（17日）クリスマス・キャンドル・サービス+クリスマス祝会（17日午後6時～W303にて）
1月	伊勢田奈緒「君は、本当はいい子なんだよ」（7日） 武藤元昭学長「礼拝で与えられたもの」（14日）

## 「キリスト教主義学校の課題」ヨハネ 10.1-18

### 1. 対峙する五つのISM

- a. Mammonism 拝金主義 マタイ 6.24 ルカ 16.9.11.13
- b. Hedonism 快楽主義 ルカ 8.14 テトス 3.3 ヤコブ 4.3
- c. Egoism 利己主義 自己中心主義 フィクピ 3.19
- d. Cynicism 冷笑主義 マタイ 25.24
- e. Nihilism 虚無主義 コヘレト 1.2  
時代的風潮「その一生の間 食べることさえ闇の中 悩み患い 怒りは尽きない」コヘレト 5.16

### 2. キリスト教教育が当面する現代的課題

- 1. 価値観を整えること 欲・得・楽 leisure treasure pleasure
- 2. 人間中心主義との闘い 人間の傲慢に立脚した量的拡大。Doing より Being
- 3. 死を忘れた文化との対峙「常に死を想うて魂を鍛えよ」植村正久  
ひとりの課題を〈礼拝〉により担っていく。礼拝において神の言葉を聴き霊性の枯渇からくる問題性を超えて、敬虔を保持する。そして「人格」を再発見する。

### 3. 名を呼ぶ教師として「感恩奉仕」

- a. 名を呼んで連れ出す（3節）イザヤ 45.3-5 43.1
- b. 羊の先頭に立つ教師（4節）内容 コース 進め方 目標を知ること
- c. 羊を愛する教師（11.15）
- d. 羊に命を受けさせる教師（10）「命への導き手である方」使徒 3.15
- e. 囲いにはいないほかの羊へ関心を抱く教師（16）

### 4. 大学生に訴える福音の心理

- a. 「光は暗闇の中で輝いている」ヨハネ 1.5
- b. 「若いときに軛を負った人は幸いを得る」哀歌 3.25-30
- c. 「インマヌエル・アーメン」マタイ 1.23 イザヤ 7.14 8.9-10
- d. 「ナンバー・ワンよりオンリー・ワン」イザヤ 43.4-5
- e. 「人生の終着駅から 永遠のいのちの始発駅へ」第一コックント 15.20

### 5. ことば

「教育は人間の中にあるものを引き出すもの 宗教は人間にないものを出会いにより与えていくもの」「神は働きそのもの その働きは自分を後ろから押している見えない力」遠藤周作

「知識より見識を、学問より人格を尊び 人材より人物の養成を！」新渡戸稲造

「最も大切なことは、教える人が喜びをもって教えることです。神が私を憐み照らして下さいました。だからこそ私の心は喜びに溢れています。この喜びを分かち合って共に神をほめたたえましょう」アウグスチヌス「教えの手ほどき」

「若者を歩むべき道の初めに教育せよ。年老いてもそこからそれることがないであろう」箴言 22.6

—卒業礼拝講師 山北宣久先生を囲んで—



青山学院院長  
山北 宣久 [Nobuhisa Yamakita]

大学開学以来、毎年、大学教育に携わっておられる先生を卒業礼拝講師にお招きし、午前  
に続く午後のひと時、教職員研修会を実施して参りましたが、今年度は、青山学院院長  
山北宣久先生に「キリスト教主義学校の課題」と題して、お話していただくことになりま  
した。その後、先生を囲んで自由に討議したいと思いますので、是非、ご出席頂きたく宜  
しく願います。

学長 武藤元昭  
宗教主任 伊勢田奈緒

日時	2014年3月13日(木)	午後	1:00~2:30
	I 講師による発題		1:00~2:00
	II 自由討議		2:00~2:30

場所 W303教室

【山北宣久先生略歴】

1941年、東京生まれ。立教大学、東京神学大学卒、同大学院修了。  
品川教会伝道師、三崎町教会副牧師、聖ヶ丘教会牧師を経て、  
2010年7月より青山学院院長に就任、現在に至る。

## 『キリスト教研究年報』執筆要綱

- 1 本誌は、静岡英和学院大学及び静岡英和学院大学短期大学部に在籍しているキリスト者教員(過去に在職していた者を含む。)の研究年報誌であり、該当教員の研究論文、研究ノート、その他キリスト教関連記事(チャペルなど)を掲載する。
- 2 編集委員会は、キリスト者教員である委員長及び教員若干名によって構成する。
- 3 委員長は、宗教主任とする。
- 4 原稿の掲載は、編集委員会の審議を経て決定する。
- 5 執筆者による校正は再校までとし、原則として大きな修正は認めない。

### 投稿要項

- 1 論文原稿は、未発表のものに限る。
- 2 原稿について
  - ①原稿は、原則として横書きとし、電子媒体で提出する。
  - ②「研究論文」は、1,600字以内(注・図表等込み)の完全原稿とする。
  - ③「研究ノート」は、12,000字以内(注・図表等込み)とする。論文としての完成度は要求しないが、新たな方法論や視点を提供する内容であること。
  - ④原稿は返却しないので、写しをとっておくこと。
  - ⑤使用ソフトは、マイクロソフトワードとし、文字フォントは、原則として和文では明朝体、欧文では Century 体とする。
  - ⑥原稿の文字の大きさ(ポイント)は、10.5ポイントとする。
  - ⑦原稿の用紙設定は、A4・縦置き・横書きとし、余白は、上 32mm、下 30mm、左右はともに 25mm とする。
  - ⑧原稿の字数設定は、1行半角 80字(全角 40字)、各ページ 40行とする。

### 附則

この要項は平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

## 編集後記

『キリスト教年報』第三号を発行することが出来ましたことをうれしく思います。第一号は「キリスト教と音楽」、第二号は「キリスト教と教育」というテーマでしたが、今号は「キリスト教と出会い」というテーマのもと、5名のクリスチャン教員による執筆となりました。正直なところ、第三号は発行できるのだろうかかと危惧を抱いておりましたが、今回は一番、ボリュームがあり、また様々な専門分野のクリスチャン教員の魂がこめられたものとなり、編集責任者として感無量です。ヨシュア記1章9節「わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか、うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」を心に持って、これからも、クリスチャン教員として研究と教育に励んでいき、キリスト教を伝えていきたいと思えます。

今回の執筆者の紹介を簡単にしますと、先ず、『大学生によるキリスト教受容過程』を執筆の谷口ジョイ先生は英語教育の専門家で昨年より本学で教鞭をとっています。『長崎の教会群とキリスト教関連需要過程』を執筆の崔瑛先生は人間社会学科の観光学の専門の教員で若手のホープです。以上、二名の教員と私は数回、三人会を開き、互いに研究の進捗状況を話し、論文作成のために励まし合ってきました。『キリスト教主義園における保育方針の具現化』を執筆の鈴木幸子先生と『キリスト教における「食」教育の実践例とその意義についての検討』を執筆の木下ゆり先生（現在、桜の聖母短期大学）は昨年3月まで本学の教員でした。鈴木先生、木下先生に投稿いただいたことを心から感謝いたしますと共に、両先生方のこれからの研究がますます豊かなものとなりますように祈ります。尚、2014年3月13日に行われた教職員研修会の際、配布された山北宣久先生のレジメと2014年度の静岡英和学院大学における宗教活動報告を掲載します。

最後に、『キリスト教年報』第三号に協力して頂いた本学教員、並びに前教員、また篠原印刷株式会社の堀氏に心から感謝いたします。

宗教主任 伊勢田 奈 緒

**キリスト教研究年報 第三号**  
**Christianity Study Annual**

2015年3月31日印刷

2015年3月31日発行

編集 「キリスト教研究年報」編集委員会  
発行 静岡英和学院大学キリスト教研究会  
静岡市駿河区池田1769番地  
電話(054)261-9201  
印刷所 株式会社 篠原印刷所  
静岡市駿河区登呂6-7-5  
電話(054)286-5141